

福山市市制施行100周年記念協賛事業

私の戦争体験証言集



Piece for Peace

～戦争の記憶を繋ぐ～



福山市人権平和資料館

はじめに

2015年（平成27年）は、戦後70年、福山空襲から70年の節目の年であり、福山市人権平和資料館では、「ふくやまピース・ナビ（平和案内人）の皆さんと協働して、戦争の実相を明らかにする取組を行ってまいりました。

2015年（平成27年）5月に、福山空襲を中心に戦争体験をお聞きする会を開催し、以降、個別に聞き取り活動を行ってまいりました。それは、できるだけ多くの証言を集めることで、戦争の実相に近づくことができると考えたからです。

この証言集のタイトル、「**Piece for Peace**」は、一人ひとりの証言が、平和な社会を築くための土台の一部（**Piece**）だという意味です。そして、戦争体験を後世に繋いでいかなければならないという、私たちの責務を明らかにしたものでもあります。

この証言集を、2015年（平成27年）10月に発行したDVD「福山が燃えた日」と、2016年（平成28年）に発行した被爆・福山空襲70周年記念誌「福山が燃えた日」と併せて活用してください。そうすることで、戦争は二度と起こしてはならないということを、より深く理解していただけるものと確信しています。

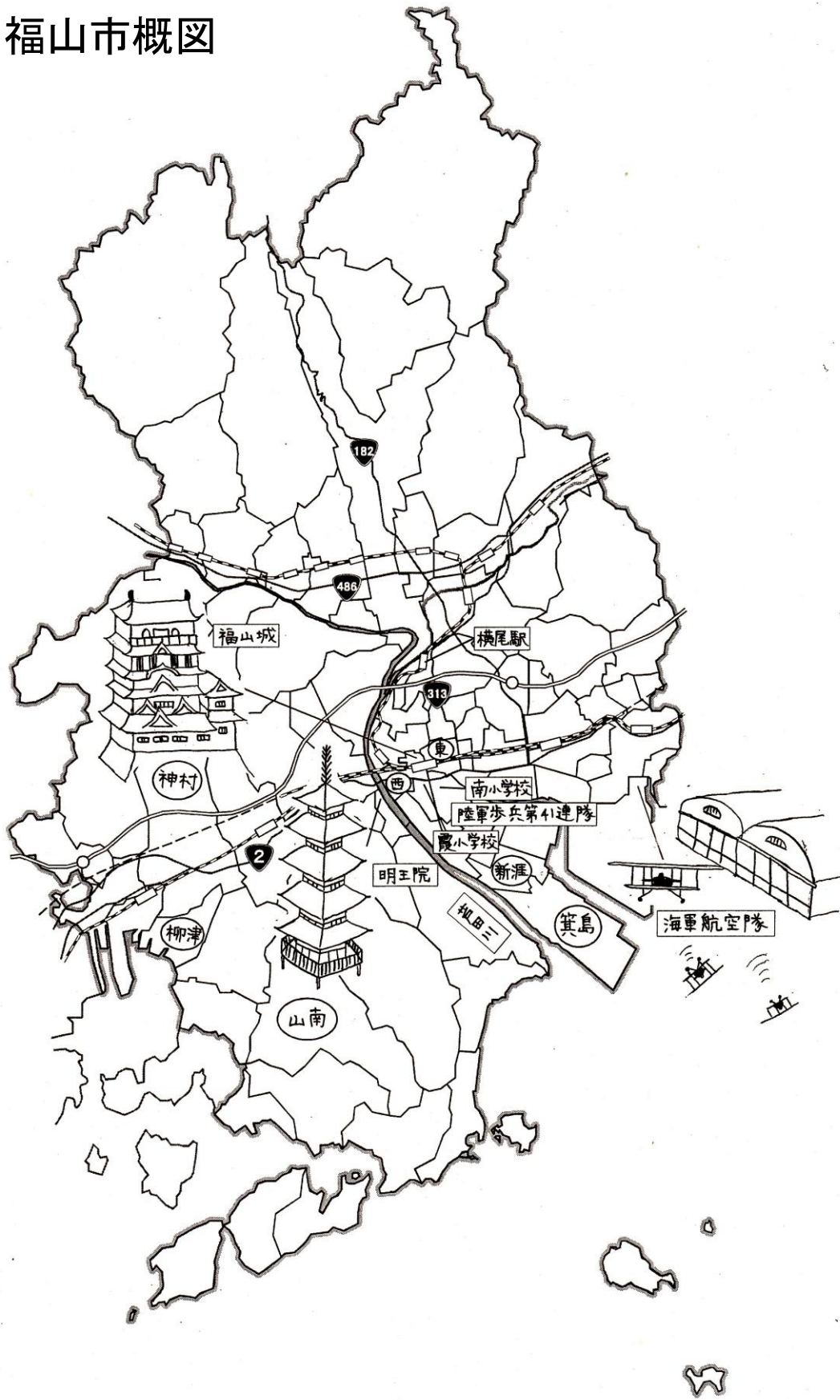
2016年（平成28年）7月

福山市人権平和資料館
館長 渡邊 弘

目 次

1	福山市概図	1
2	「福山が燃えた日」リレートーク ～私も聞きたい！話したい！～	2
3	座談会「戦中・戦後の暮らし」	17
4	福山空襲と戦時下の暮らし（高石 朝美さん）	24
5	霞国民学校初等科訓導（松本 和子さん）	27
6	戦災の想い（開原 則二さん）	32
7	戦時中の学童の日々（三鼓 照子さん）	34
8	シベリア抑留（土井 茂さん）	36
	旧満州・旧ソビエト連邦地図	49
	フルムリ地区収容所所在地	50
9	被爆体験伝承の集い	51
	（池尻 博さん）	52
	（清代 律子さん）	54
	原爆被災地図	58
10	福山地方航空機乗員養成所（佐伯 新三さん）	59
	福山海軍航空隊施設目録図	64

1 福山市概図



2 「福山が燃えた日」リレートーク ～私も聞きたい！話したい！～

と き：2015年（平成27年）5月31日

ところ：旧霞幼稚園

司会：堀家 美智子（ふくやまピース・ナビ）

福山空襲を体験し、戦時下の福山の街の様子や暮らしの記憶を辿って、目で見、心で感じたことを、証言者の方々に語っていただき、それを聞く会です。戦後生まれの方々、私も含めて証言して下さる方のお話を通して、その当時のことを知り、心情を理解し、思いを共有していただければと思います。2時間という限られた時間ですが、これを出発点として、どんどんこういった輪が広がることを願っています。

人権推進課長 渡辺 慎吾

本年は戦後70年という節目の年でございます。そして市街地の8割を消失し、354名もの尊い命を失った福山空襲から70年という歳月が過ぎようとしています。

その70年という歳月のなかで、当時の体験者の方が亡くなられたり高齢化されたりして、本当にその体験を語る方々が非常に少なくなってきたと思っています。それと同時に、空襲の体験というものが風化しつつあると感じているところです。我々は、二度と戦争という過ちを繰り返してはなりません。そうした意味でも今を生きる私たちが、しっかりと次の世代に、さらに未来へと空襲の体験や平和の尊さを継承していかなければならないと考えております。

司 会

3人の方には、福山空襲当日のこと、戦中戦後を通して、そのなかで見聞きしたこと、衣食住について、それから心で感じたことなどをお話していただきます。

では、3人の中で一番年少であった藤井弘一郎さんからお願いいたします。当時霞国民学校2年生、7歳でした。藤井さんどうぞよろしくをお願いいたします。



リレートーク会場風景

藤井 弘一郎さん

こんにちは、私は野上町二丁目に在住しております藤井といいます。よろしく願います。

戦時中は、山陽病院の横に住んでいました。真つすぐ行って、体育館の通りが昔は土手だったんです。その下はずっとスイカ畑、イモ畑、トウモロコシ畑でした。おそらく淀川までが畑だったと思います。そこへ小さい小屋を建てて泊まりに行つて、スイカの番をしたりしていました。逃げるための策だったんじゃないかと思いますがね。8月8日の空襲が11時15分（正しくは10時25分）でしたかね、予告の警報だったので、ちょうど泊まりに行つておつて、空襲警報が鳴った折には、親に連れられて逃げたのか、水呑の方まで行つていたように思います。芦田川の水が非常に温くて、風呂のような感じを受けました。しばらく

その辺りで右往左往したんじゃないかと思うんですが、ですからこちら（市街）が燃えているのはほとんど記憶にないです。空を見たら飛行機が飛び交って、なんだか火の玉のようなものが落ちているなあと、よく見えました。街にいないで外からですからね、本当によく見えました。それで一旦帰ったんじゃないかと思うんですが、一寝入りして起きてみると、護国神社（今の体育館のところへ皇紀 2600 年を記念して、備後一の護国神社を建ったように後から聞いております）が、一瞬のうちに跡形もなく燃え落ちてしまって、朝まで火の手が上がっていましたが、そのような記憶は十分もっております。



B-29

それからは、沼隈へ疎開したので、（ここへおられる方も同じような食事をとっておられたんじゃないかと思いますが）イモやイモづるを食べて、ご飯はおコメを少し入れたイモのお粥をいつも食べていたように思います。幸せなことに町でなく田舎なので、野菜などを作っているから、そういうものを食べて生活していました。当時はみんながこういった生活だったので、自分だけが困っていたような記憶は残っていません。

霞小学校へは 2 年生まで行った記憶があります。その後は沼隈の小学校へ行きました

たが、やっぱりそこも運動場が全部イモ畑になっていました。田舎へ疎開したので、食料にはさほど不自由ではありませんでした。こちらはどうだったんでしょうかね。

戦後 70 年ということですが、まだまだ、今も戦争をしている国もあるので、そのことも心の片隅に置いて、このリレートークを实のあるものにしていただければいいんじゃないかと、私は感じています。

司 会

はい、藤井さんどうもありがとうございました。話し足りないことや、みなさんからの質問は後ほどいかががいます。それでは近藤さんよろしくお祈いします。

近藤 茂久さん

みなさんこんにちは。私は戦災当時、古野上町の現在地に住んでおりました、今は古野上町〇番〇号、昔の番地でいえば〇〇〇番地ということで、戦前戦後を通してずっと古野上町に住んでいます。当時私は国民学校の 6 年生でございます。今日は、当時の記憶をたどりながら、お集まりのみなさんと一緒に話をする機会を得ましたことをたいへんうれしく思っておりますし、今日の話の中にもいろいろ出てくると思いますが、どうぞよろしくお祈いいたします。

私が思うに、今、世代交代が進んでいますが、私たちの戦前戦後当時の体験を次の世代に伝えるということ、この事実を風化させないように、とにかく、これからの人に伝えておきたいという願いで、今回のパネリストの依頼を受けました。今日はどのような話をしていいか分かりませんが、戦前戦後を通じて、いろんな体験をし

たことをみなさんと一緒に語り合えればよいなと思っています。

2013年ですか、「今でしょ」という新語がありましたね。その言葉のとおりだと思います。戦前戦後のことを語るというのは、今でないとできないと思います。福山が焼けた日のことを話せる人というのは、もう80代なんです。戦後70年ですから、80代の人でないと話すことができないんです。そうすると、80代の方はだんだん少なくなってくるんです。いつまでも80代ではないですから。だから今話しておかないと、次の世代にこの事実が伝えられないということ強く思っております。そうしたことで、今自分にできることは、こうして話すこと、そして今日いらっしゃったみなさんと一緒に（いろいろ出てくるとは思いますが）話の輪の中に入りながら、話したいと思っています。

空襲のとき、私は、今、市の水道局の駐車場にしていますが、軍の給水場があった所の近くに住んでおりました。ご存じと思いますが、コンクリートの直径が3~4メートルもある高い塔があったと思いますが、そこに防空壕がありました。家から約50メートルぐらいですか、そこに私は逃げ込むようにしておりました。警戒警報が鳴ってそこに行って、次に空襲警報が鳴ったときは、パラパラと火の手が上がるような状況でした。ああ、街が焼けているなあという程度で私は空襲を見ておりましたが、まことに恐ろしいというか、子どもながらに怖いなと思ったのですが、しばらくして、水道局の所が昔は県の土木事務所になっていたと思うんですが、（2階建ての）それに火がつきまして、その辺り一面が昼のよう

に明るくなった途端に、古野上町の西、霞町の西にいったんに焼夷弾が落ちてきて、私が逃げていた防空壕の中にも、入口から焼夷弾が一発転げ込んできました。私は慌てて防空壕に入っているみんなと逃げたんですが、そのとき顔に火傷を負いました。その当時は、火傷といっても薬がありませんから、ドクダミ草、臭い草がありますね、あれを煎じて顔に塗りました。今考えると、あの当時火傷をしていなかったらもっときれいな顔になっていたと思うんですが。とにかくこのように治ったので、非常にうれしかったです。



M17-A1 (M50を110発集束)

焼け出されて1ヶ月後に、母の里が山口県の西市、今、ホテルの里で有名なのでご存知の方も多いかと思います。そこへ高校1年まで疎開しておりました。いつまでも田舎にいるわけにいかないの、高校1年の2学期を終えて福山の葦陽高校に帰ってきましたけれども、とにかく戦争中ですから、食べ物がなかった。今、藤井さんも言われたように、イモの茎を煎じて食べたり、イモの葉っぱを炒めたり、それから終戦後も油粕をフライパンの上で練って食べたことがありますけれども、とにかく食料が足りなかった。そういった中で、焼ける前

に近所の友だちが、田舎に親戚があるもので、白いおにぎりを食べているのが、本当に欲しくて羨ましいなと思ったんですが、見かねてその子のお母さんが、「おいで一つあげよう」と言われておにぎりをもらったことが、いまだに印象に残っております。ありがたいなと思いました。昔はそういう近所隣りが、力を合わせながらやっていたことを思い出します。

焼けて翌日、私は、父と一緒に家のほうへ行ったら、本当に火事の後といいますか、煙が出ているだけで何にもなく焼けておりました。ただ私の印象に残ったのは、一枚のトタン屋根に3つの穴が開いていたということで、いまだに忘れられません。これだけ数多い焼夷弾が落ちたんだと、これでは焼けるわと思いました。それと、福山のお城が遠くの方で赤くなって崩れていく姿を見て、悲しいやら、子どもの頃ですから、きれいだなとも思いましたが、とにかく悔しいなと思いました。ただ防空壕から出て川まで約50～60メートルありますが、本当に逃げるのに一生懸命で、イモづるに足を取られながらやっとの思いで川に入って、みんな川に逃げているので水は濁っていますが、とにかく飲まないで熱くてどうしようもないので、水を一生懸命飲みました。

このような経験を、今の子どもたちに二度と味わわせてはいけないなと思っております。命があって今があるんだと思えば、感謝しなければいけないなという気持ちでいっぱいでございます。今日こうしてみなさん方と一緒にお話ができることを、本当に感謝しております。ありがとうございました。

司 会

近藤さんありがとうございました。続いて木村さんよろしく願いいたします。

木村 滋さん

今は小学校の前の方へ転居しているんですが、当時の家は、文字通り猛火の真っただ中でした。私の家には、親父とおふくろと妹がおりました。妹は小学校の児童だったんですが、空襲を私は覚悟しておりましたので、夕方になると自転車で芦田川の向う側（明王院のところ）の親せきの家へ妹を連れて行っていました。だから、そちらは安心だったんです。私の親父は民間人ですが、空襲警報が出ると、警察へ詰めなければならぬことになっていたようです。警官ではないんですよ。臨時に応援に行くんですね。だから早速出て行きまして、家には私と母親がいました。もう火の手がどんどん広がりました。日本でも爆撃は2種類ありますね。爆弾が落ちる都市と福山市のように爆弾は一発も落ちないで、全部焼夷弾。焼けるのはこちらの方が大きい火が出ています。爆弾の方は、巨大な爆弾ですから爆風によっていっぺんに命を落とします。福山の場合はほとんどが焼死です。直撃弾に当たられた方もあったと思います。たくさん落ちましたから。私も母親を連れて逃げたんですが、目の前で6角形のこれぐらい（手を広げて、約35センチの長さを示す）のが、屋根や地面に落ちるとそのショックで破裂して火が出るんです。だから芦田川に落ちたのは、砂へ突っ立ったままで発火していないんです。これが戦後子どもが芦田川で遊ぶ時に、大変危険なものでした。早く撤去はされました。

私は生意気なものですから、最後まで頑張りました。ご近所の方もおられるんですが、ほとんど退避されていたなか、まあもうちょっと、あれでも消せるんじゃないかと。消えるわけではないですよ。家中が全部燃えているんですから。もうこれ以上は無理だというので、ほとんど腰が抜けかかった母親を引っ張って出るときに、押入れから布団を出して、防火のために家の前に水を溜めていた防火水槽に浸けて、母親に頭から被らせ、私も被って逃げました。



もう道路は両側が燃えて危なくって通れません。前の家を通って道三川に入り、川を渡るのを躊躇していた母親を引っ張って向う側に渡り、道路もよその家も関係なく燃えていない所を選びながら、やっとの思いで芦田川へ逃げました。そして、芦田川を渡って向う側の土手に着きました。そちらには親戚があるものですから。それに妹はそこに行っていましたのでね。親戚に避難して振り返ったときに、(まったくの偶然ですが) 市内は猛火に包まれて大変な状況でしたが、福山城の天守閣が完全に燃えていまして(伏見櫓は燃えなかったようですが)、東側へドッと崩れ落ちたのを見て、ああ福山ももうこれでおしまいだなと、それよりももう戦争は駄目だなと、つまり敗戦を痛感しました。間もなく終戦になったん

ですが、日本中があちこちやられました。福山が確か最後から2番目の町だったと思います。

福山も41連隊という軍隊がありましたので、狙われる可能性は多分にあっただけです。それから三菱電機が軍需工場でしたから、福山も必ず狙われるなと思っていました。いよいよ最後の最後にまわされて、ついでに焼けずに済めばよかったです。福山が8月8日でしたか、終戦の1週間前にやられたんです。たくさんの方が逃げていましたが、あの焼夷弾というのは直撃も可能性があります。数をたくさん落とすから。家に落ちると屋根に当たりますね。落ちるときはシューっという音で落ちるんですが、屋根やコンクリートの道路に当たるとカーンという鋭い音がして、それで爆発するわけです。そして火を吹くんです。それで家に燃え移るんですね。中には直撃弾が偶然当たられた方もあったと思います。死者は354名と言われますが、そのうち、子どもさんが何人いたかというのは、分からないそうです。一番の被害者は子どもと女性だと思います。私は母親を引っ張って逃げる事ができましたが。

それともう一つ悲惨だったのは、国の指導で各家に防空壕を作らせていました。私の家も裏庭に作りました。個人が作る防空壕ですから、役に立たないんです。案の定それに避難した人は、防空壕の中で焼け死んだ人がかなりおられるんです。私はこんな所に入るもんじゃないと思っていたから、物を入れておっただけで人間は入らずに逃げました。国も市も大きな戦争になって、手の打ちようもなかったんでしょうね。空襲があっても抵抗は一切しないんですから。

東京なんかはB-29 が来ると反撃していたようですがね。まず当たりませんねえ。当たったというのは聞かなかった。福山はそんなものはないので、やられっぱなしでした。

その時誠之館の3年生でしたから、子どもとは違うし無事逃げおおせました。ところが帰ろうにもまったくの焼け野原で、家はありません。妹と母親と連れて、母親の実家がある服部に何カ月か疎開しました。学校へ行くどころではありません。誠之館は今の合同庁舎のところにありましたが、燃えなかったんです。あの一角だけが焼失を免れたんです。学校はあるわけですから、授業は再開するんです。しかし私は行きようがない。服部の母親の里において、列車も動いてない状態ですから、しばらく学校へ行かれませんでした。父親は焼跡へ廃材を集めてバラックを建てて、しばらくして帰りましたけれど、私や妹は帰っても住む所がないので、ずっと学校を休んでいました。それでも卒業の時には、皆勤賞をくれるんです。先生のほうも誰が居たのか居ないのか分かりませんからね。

日本は平和ですが、今もなお世界では戦争と言っていいほどの大変なことが起こっている国もあります。そのような国に思いを馳せると、心が痛みます。これからの平和を祈って私の話を終わります。ご静聴ありがとうございました。

司 会

パネリストのみなさん、どうもありがとうございました。今のお話を踏まえて、このところはもう少し詳しく聞きたい、ちょっと聞き逃したんだけどということでもか

まいませんので、お聞きになりたいことがあれば、挙手のうえ質問をしてください。

質 問

木村さんにお伺いしたいんですが、当時生活されていた、戦争をしている日本の社会、どういう状況で戦争に至ったか、国民に情報があまり伝わっていないと思うんですが、学生生活の中で、戦争をしている社会についてどういう気持ちで過ごされていたか、聞かせていただければと思います。

木村 滋さん

中学校の3年生ですから、物心は充分ついているんですが、私の一級上の4年生は志願して軍隊へ入れました。幼年学校へ入って軍人になります。それから特別に志願して(特攻隊がありますよね)、少年飛行隊への入隊が可能でした。考えてみれば、16～17歳ですが、時代の流れでしょうか、行かなきゃと思うのか、行ってみたいと思うのか、死んでもいいと思うのか、志願して何人か行きました。幸か不幸か私の学年までは志願できない年齢だったものですから、同級生は戦場で犠牲になることはありませんでした。空襲等で、あるいは広島へ転校しての被害者はいましたが、戦地へ行っての被害者はいませんでした。だからこうして生き残れたんだろうと思います。学校も授業どころではないんです。私たちのときは、学徒動員という制度がありました。学校へは朝からいっさい行かない。上級生は呉工廠(くれこうしょう)へ大量に動員されました。軍需工場があったんです。呉は日本でも有数の軍事都市でしたから。福山では三菱電機というのが大きかったんです

が、あれだけです、大きいのは。3年生は遠くへは行かされず、市内の三菱電機へ学徒動員で朝から工場へ出勤して、終わったら家へ帰っていました。誠之館は焼け残ったので学校は再開したんですが、家が焼けて学校へ戻りたくても戻れない。欠席者がたくさんいました。私もそのうちの一人ですが、やがて父が家を建ってくれました。母と妹と家に帰り復学したんですが、帰って来られない同級生もたくさんいました。住んでいた場所によっては、学校に行きたくても行かれない。学校へ行くにしても食べるものがないです。母親が弁当を作ってくれますが、おコメがないんです。私たちはそれでも母親が、実家へ行ってコメをもらってきていました。コメのご飯にサツマイモが入っている、コメよりもイモのほうが多くて、うまくないけれどそれしかないんです。

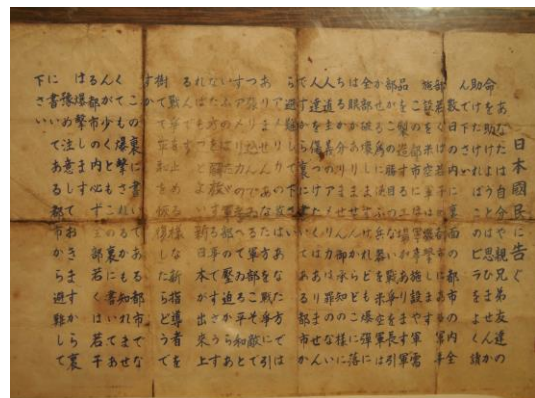
私はその後、広島の高師へ進学して寮へ入りました。寮は広島市の中心部にあり、掘っ建て小屋でした。その寮の食事は大変なものでした。お粥の湯のようなもので、まともなご飯なんか食べたことはなかった。イモを食べたりしていました。実家が農家の学生は、コメを送ってもらっていました。私もそうですが、飯ごうを買って炊いて食べていました。それはとてもおいしかったのを覚えています。イモも麦も入ってないですからね。やがて、学校へ行き出しまして、おコメより麦やイモがたくさん入った弁当でした。でも、田舎から来ている同級生や裕福な家庭の同級生は、白いご飯の弁当でした。私らは堂々と弁当の蓋（ふた）を開けるんですが、白いご飯の弁当の同級生は蓋（ふた）をずらして隠すよ

うにして食べていました。

原爆の後なのに、よく寮があったなあと思います。掘っ建て小屋でしたけれどね。それでも、なんとか学校を終えまして、22歳でしたか誠之館の教員になりました。

司 会

みなさんの質問にはなかったのですが、近藤さんの話に出てきたように、福山空襲の一週間前にアメリカが「今度空爆するぞ」という予告のビラを撒いたらしいんです。「伝単」というものですが、近藤さんはそれを見られているようなんです。見られた内容とか感じられたことを含めて、みなさんへのメッセージなども話していただきたいと思います。



7月31日夜、福山に投下されたビラ（伝単）

近藤 茂久さん

私は、ビラを拾って、親父に「こんなものが落ちていた」と見せたとたんに怒られました。「捨ててしまえ、そんなものは読まなくていい」と言われましたが、6年生ですから詳しいことは読めるわけではないんですが、結局、親父に取り上げられたことは覚えています。たしかにそのビラの中には、「次は福山だよ、戦争をするみなさん方は早く気がついて福山から避難しなさい。」というような内容でしたが、事実、空爆を受

けたわけですが。そのビラを見て、アメリカの兵隊も国も、ただ人を殺すだけじゃないのかなというような印象を親父ももったのか、「このビラを見たら、みんな逃げないといけない」と、ちょっと言ったような記憶があります。だけど、その時代それができるかできないかは別として、なかなかできるものではないですね。非国民だと言われるからね。だから親父もあまり大きい声では言いません。とにかく取り上げられたことだけは、記憶に残っております。

ただ、みなさん方にお知らせしたいんですが、2012年11月2日に霞小学校の図書室で「記憶遺産学習」という学習会が1時間ぐらいありました。その時、霞学区の9人の体験者が、6年生52人の子どもたちに話をしました。ちょうど私も6年生の時に空襲を受けたので、何か因縁めいたことを感じました。当時の6年生が今の6年生に話をするのかなと思いましたけれども、私のところに12枚の感想文が届きました。全部自筆のものが届いたことに、非常に感じるものがありました。そのなかで共通して言えることは、「平和」という言葉を必ず書いているということです。「平和でありたい、この平和を続けていくにはどうすればいいか」というような内容もありましたが、「平和」という言葉を全員書いているわけです。だから、こういった子どもたちのためにも、そして平和のためにも、戦争中のことの真実を伝えておかなければならないと感じました。私の孫も原爆資料館を見学に行ったらしいのですが、「広島は原爆が落ちたのに、福山はどうして落ちなかったの？福山は焼けたの？」と質問しました。小学校2年生ですけれども、いくらか関心があるようで

す。こういった機会を通して、若い世代の方に、是非活字なり写真なりで、正しく伝えていくことが大切ではないかと思っております。

司 会

では、藤井さん、メッセージなどありましたらお願いします。

藤井 弘一郎さん

あのような悲惨なことから70年経って、まずまず平和に生活できるような現状ではないかと思えます。先ほど言ったように、世界では戦争が毎日のように繰り返されています。この悲惨なことだけでなく、子どもを特攻隊に送り出した親の気持ち、また生きては帰れない本人の気持ちを思い、家族のことを思い、傷ついた戦友に薬を与えた人が亡くなり、薬を与えられた方が助かるというようなことも思いながら、戦争のことを蘇らせていただければ、もっともっと違った観点から思いを馳せることができるのではないかと思います。よろしく頼みます。

司 会

では続きまして、演題にある「私も聞きたい」というところを含めて、「私も話したい」というところを今から展開させていただこうと思います。最初は、福山空襲の当日または前後のご自身の体験や聞かれたこと、その日の朝からのこと、その時のことなど話していただくと思います。特に、先ほど出ていました伝単というビラのこととか、焼夷弾、防空壕、防火槽など。それから、藤井さんの話にもありましたけ

ど、翌朝まだくすぶっていたという話でしたが、翌日のことでもかまいません。福山空襲という大きなくくりの中で、憶えておられることを話していただけたらと思います。

それから、戦災で燃えた当時のお金を持って来てくださった方がおられます。その方が最初に口火を切ってくださいと助かるんですが。見えにくいかもしれませんが、お金がこのようにくっ付いているんです。元の色はなくて黒くなっています。歪んでもいます。では、高橋さんお願いします。

高橋 加造さん

南学区から来ました。旧町名は東霞町です。誠之館のすぐ西側のところです。生まれは昭和19年3月で、戦争の記憶はございません。ちょうどその時、母親の里の新市町宮内というところに疎開していました。当時女学生だった叔母が二人いまして、戦後だいぶ経ってから聞いたんですが、祖父も親父も戦争の話は一切してくれませんでした。叔母がたまたま話してくれたのは、誠之館のプールは埋め込み式でなくて据え置き式だったんですね。その排水の水が道三川へ流れるようになっていて、プールの飛び込むところの横に通路があって、そこがちょうど屋根のような形になるので、そこへ叔母二人はおじいさんおばあさんと一緒に逃げて、自分の家と福山城が焼けるのを見たと言っていました。親父は戦争に行っていて、そういう話はしてくれませんでした。私は福山の歴史に興味を持っていますので、戦時中の紙幣とか硬貨とか、あるいは戦時中だけでなく、債券とかも今日も持って来ていますので、よかったら見てく

ださい。

司 会

お金の方は、ご自宅の焼け跡からということですね。お金がくっ付いてしまうほどの高温だったという証拠になるのではと思います。

水田 富子さん

私は、現在は新涯町に住んでおります。戦争体験をしていますので、毎年新涯小学校で戦争体験を話しております。私が4年生の時だったんです。本当に怖くて、忘れられませんけれど、妹がお母さんにおんぶされて、家の裏の高い山で石槌山というのが箕島にあるんです。私は箕島生まれなんです。3人一緒に逃げたんですけれど、ちょっと振り返りますと福山が火の海になっているんです。そのときは、本当になんとも言えませんでした。怖くて怖くて、もうどんどん燃えていっているんです。子ども心に目に焼き付いていて、今でも思い出します。辛い食べ物も質素で、麦ご飯ばかり。弁当はほとんど麦なんです。お母さんが弁当にはおコメをすくって入れてくれたんです。おコメが欲しいなあと、贅沢な考えを子ども心に思っていました。祭りなどはすごく楽しいんです。親心でお餅をついてくれるのが楽しみで、指折り数えていました。その当時の服装と言いますと、質素で木綿の服を着て、履物（はきもの）は草履（ぞうり）です。自分で稲藁で編んで履（は）いていたんです。学校に履いて行ってたんですけれど、何日か経つとすぐにだめになるんです。一人の同級生が当時運動靴を履いていました。その子の家は裕福

なんです。それが羨ましくて、「いいなあ」と言って友だち同士がみんな羨ましがっていました。わがままは言えないので、親から作り方を教えてもらって自分で編んでいたんです。他の人も全部自分で作っていました。食べ物はサツマイモのツルとか、イナゴとかいろんなものを食べていました。豆とかサツマイモとかは家でたくさん作っていたので、思う存分食べました。学校から帰りましたら、サツマイモをいっぱい持ってお父さんやお母さんの所へ行っていたような状態でした。

司 会

水田さんありがとうございます。生活のことも話していただいたんですが、後ほど詳しく話していただければいいかと思いません。ほかに福山空襲について、どなたか。

河相 博子さん

当時女学校の1年生でした。新涯に住んでいました。空襲があった夜は、テレビもないし、夜は灯火管制で真っ暗ですから、早く寝ていたと思います。空襲警報が鳴ったので起きて庭に出てみると、一番最初の空襲は福山の周辺からやったんじゃないかと思っていますが、それから、本庄、それと新涯の3番（私は1番に住んでいた）、芦田川に近い方で、つまり福山の周辺がまず燃えています。飛行機が爆弾を落とすんですが、それは全部焼夷弾だと思っていたんです。でも、人権平和資料館などで話を聞くと、焼夷弾は落ちて爆発しないと火が出ないということらしいのですが、私はその焼夷弾が束ねてあったのが燃えながら落ちたんじゃないかなあと思っています。こ

れは確信ではありませんが、今でも疑問に思っていることです。その爆弾がどこから落ちるかという、（私の家は一文字堤防の近くなんですが）瀬戸内海の上の辺りから落ちてくるんです。家の方に落ちるかと思うと屋根を越して、街の方へ吸い込まれるように落ちていくのを見ました。新涯には当時ブドウなどを植えていて、おじいさんが大事な荷物を出してブドウの下へ置いていたのを憶えています。東の方からは街や城が燃える様子は見えませんでした。1時間経って敵の飛行機が帰って行った後、あっちこっちからボンボンと大きな音がしながら燃えるのを、何とも言えない空虚な気持ちで眺めていました。当時は夏休みと言っても、兵隊さんは休みがないということで、学校がありましたので、次の日の朝、友だちと二人で歩いて行きました。けれども、今のリーデンローズがある辺りの堤防の上から見ると、まだ街はくすぶっていました。だから、「運動靴でも歩けないよなあ。」と言いながら見た景色は、福山駅のプラットフォームや焼け落ちた屋根が見通せるほどでした。私たちは、「怖ろしいから今日は休もう」と言って、家に引き返しました。

先ほど木村さんは皆勤賞をいただいたと言われましたけれども、焼け出された人は一カ月休んでも出席扱いでございました。私は家が焼けておりませんでしたから、一日の欠席が卒業するまでちゃんと付いていました。そういう記憶があります。当時福山にも建物疎開があったんです。入り江の南側の堤防に沿って建っていた家は、ずっと倒していました。私の親戚が借家を持っていたのですが、それも建物疎開になって、

倒した材木を全部私の家に置いていたので、戦後それを持ち帰って、バラックのような家を建てたという記憶があります。

それから、もう一つみなさんに知ってほしいのは、人権平和資料館に行って、「もう一つの福山空襲」と書いてある言葉を見つけたんです。それは、私が女学校のとき、学校の備品を疎開させていました。「リヤカーのある人は持ってきてください。」と言われたので、私と友だちがリヤカーを引いて、今の新浜町の道（お大師さん道）を行っていたら、空襲警報が鳴ったんです。警報が鳴ったらとにかく家に帰らないといけないということで、引き返しました。そうしたら真黒い飛行機が2機飛んで来て、大門にあった海軍航空隊をめがけて、バリバリと機銃掃射をしました。私は家に帰ってちょうど家の窓から見ました。友だちは近所の家に避難したと言っていました。その時の被害というのは全然分かりませんが、そういうことを体験しております。その真黒い飛行機が終戦の2～3日あとに、また福山の空襲の様子を見に来たのか、同じ飛行機が来ているのを見ました。そういう体験をしております。

司 会

河相さん、どうもありがとうございます。女学校1年生だったということで、かなり詳しく憶えていらっしゃるし、私たちがあまり聞いていなかった、建物疎開や学校備品の疎開などを話していただきました。

杉原靖子さん

霞町二丁目の杉原といいます。新涯とい

う懐かしい名前が出たので、つい手を挙げてしまいました。新涯の、今でいう「正木角」の側の2番に住んでいました。その当時、私は4歳、昭和16年生まれです。その前の年に「四つ身の祝い」をして貰って、あの当時すごく嬉しかったのが、コッポリ下駄というんですか、上に畳表が付けてあって、横の方に穴が開いていて、鈴が鳴るという下駄でした。ものすごく好きだったんです。それを抱えて、田んぼのほとりに防空壕が掘ってありましたが、そのなかへおじいさんに連れられて入っていくときに、（表現は悪いんですけど）北の方がすごくきれいに明るく燃えていたという印象が強く残っています。私は南から北を向いて立っている感じですね。父親は兵隊に行っていて家にはいませんでした。おじいさんと母親、それから兄二人いたのですが、子どもたちを死なせてはいけないということで、おじいさんは一生懸命留守を守ってくれました。その次の日に、田んぼには稲もそんなに大きく育ってなくて、水が張ってありました。その田んぼに近所の男の子たちと畦道を通って、焼夷弾が落ちているのを見ました。田んぼの中で不発弾が黒こげになっていました。「畦から見るのはいいけど、絶対に触ったらだめ」と言われていました。触って怪我をして、手を失くされた子どもさんもおられたようです。破裂したかどうかは知りませんが、稲が黒こげになっていました。ズボンと刺さったままのものもありました。畦などに焼け焦げたようなものもありましたけれど、珍しいものを見たいという感覚で、お兄さんたちについて見て回ったという印象があります。

農家ですから食べ物には不自由していま

せんでした。先ほどの方は、麦の中におコメがちょっとという表現をされていましたが、幸いなことに私たちはその逆で、おコメの中に麦がちょっと入っていたという、本当にありがたい贅沢な生活をしていたと思います。要領を得ませんけれど、4歳の子どもの時ですからね。ほとんどは昭和30年代のころになって、祖父がいろいろ私に話して聞かせてくれたことです。私が体験したというのは、その焼けた跡を見たことと、焼けているのがすごくきれいなまるで花火のような感じだったという印象だけです。

司 会

杉原さん、どうもありがとうございます。戦時中の食生活の中にも格差があったようです。コメと麦の割合やおコメとサツマイモの割合とか、おコメなしとか。

では、先ほどお話ししていただいた当時の食事について、あるいは学生生活について、また当時の服装などについてもお話しただけならと思います。

古谷 佳子さん（ふくやまピース・ナビ）

私の実家は野上町の味噌屋です。私の家は焼けたんですが、その時に大きな味噌樽が二つ割れたそうです。みなさんが、焼けた茶碗、割れた茶碗、焦げたやかんを持って味噌をすくいに来られたそうです。うちのおじいちゃんは、みんな困っているんだからということですくってあげたそうです。何百メートルもの行列ができたそうです。

私は、6年ほど前から聞き取り調査をしています。先ほど焼夷弾の話が出ましたが、野上町三丁目の工業高校の辺は焼けてない

んです。あの辺は傷痍軍人の人が、年寄りを集めて、落ちてきた爆弾の火を消すやりかたを訓練したそうです。まず、それを水路につける（昔はあの辺は田んぼばかりだった）。火が大きくなるまで時間があるので、水につけたら火が出ないらしいです。そういう訓練をさせたそうです。それで助かったそうです。

司 会

どうしても福山空襲のことに舞い戻ったりしますが、生活のことで、先ほど言われていましたが、トウモロコシにサツマイモの茎を炒めたり、フキをゆでたり、おコメに混ぜたり麦に混ぜたりという食生活だったようです。当時の食べ物についてどなたかお話ししていただければと思います。

森近 静子さん

野上町二丁目の森近と申します。当時は小学校2年生でございました。今、食物のことということでございますので、私も本日参加するに当たり、更生団子という言葉が出てくるかなと思っていたのですが、一言も出てきませんでした。

実は、更生団子というのは、サツマイモのツルと葉っぱでできたお団子でした。お団子といっても粘りつけのものを少しだけ入れて、作ってあるものでした。しかも、それは食糧切符というものがあまして、それを手に入れたうでないと買うわけにはいかなかったのです。食糧切符を手に入れて求めていました。食糧営団だったと思いますが、買い求めました。それを食しておりますので、あれはどういうことだったのかということが、脳裏に残っております。

それと同時に、先ほど野上町の方が、焼夷弾が落ちたこととお話しされました。現実、私の家は、昭和9年生まれの子を頭に、5人の子どもを両親が授かっておりました。しかも女子や女性のみでございましたので、父親が防空壕の大切さをすごく説いて、家の屋敷の中に3畳ほどのを掘っておりました。そして8月8日の日は、男性の方がみなさんバケツに水を汲んで出ておられましたので、父もみなさんと一緒に出ておりました。ちょうど11時過ぎだったと思いますが、私方の防空壕の際へ焼夷弾が落ちました。父親が「やられたあ〜」と言って頭から滑りこんできたのを、今でも憶えております。本当に防空壕のおかげだったと思えました。その防空壕は父親自慢の栗の八分板を使って作ってしまして、爆弾が落ちたとき、その板が5mほど先へ飛んでおりました。防空壕の壁のおかげで私たち7人は命拾いさせていただきました。

これから先はお願いでございますが、行政の方もお見えになっておられますし、大勢のそれぞれの分野の方のご出席を見ると、子どもたちのことが一番気なるということでございます。小学校あるいは中学校におきまして、2012年にはやりましたと言われましたが、それから3年経っています。どうかそれを継続なさって、子どもたちへ伝達・伝承していただくことが、平和教育につながるのだと思っております。お願いはこのことなんです、各方面へ働きかけていただいて、そういうことをしていただければ、「福山が燃えた日」という今日のテーマも価値ある会になるのではと思います。どうぞよろしく申し上げます。

司会

みなさんの感想を代表してお話ししてくださった感じがして、胸が熱くなりました。では、今から申しあげる言葉にピンとくるものがありましたら、それについてお話していただけたらと思います。「学徒動員」「勤労奉仕」「勉強」「竹槍訓練」、こうしたことで何か思い出したことがありましたらお話しください。

杉原 弘さん（ふくやまピース・ナビ）

霞町二丁目の杉原といいます。今77歳です。勉強についてということですが、私は当時小学校2年生でした。戦後のことについて話させていただきます。もし私と同世代の方がおられたら、当然そうだとおられると思うんですが。その当時、西小学校において、二部授業といまして、午前中が霞、午後が西、週が変わるとその反対といった具合でした。今振り返ってみたら、実際本当に勉強したのかなあという感じが心に残っております。学校へ行きますと、一番に言われるのが、「はい、墨を摺りましょう」です。そして教科書を開くと、「はい、ここからここまで線を引きましょう」、「これは全部×ですよ」というような体験もさせていただきました。



不適切な表現を墨で消した教科書

それから、天気の良い日には、「外でしましょー」、俗に言う「青空教室」ですね。そういう時代を歩んできております。それも今振り返ってみると、それなりに結構楽しかったのかなあといった思い出のほうが、印象に残っております。

最後になりますが、さっき森近さんがおっしゃった更生団子ですが、おそらく戦後の救護策だったと思います。当時の自分たちは、おいしいとかおいしくないとかというより、食べざるを得なかったんじゃないかな、と個人的には思っています。

司 会

杉原さん、どうもありがとうございました。更生団子のことが少し分かってきましたが、私の母は、コメぬかを混ぜていたと申しておりました。

戦後は、まず教科書に墨を塗るところから始まって、普通の勉強に戻っていったということでした。

私たちも気付かなかったんですが、空襲で焼け出されたので、市街地にはすぐには住めなくて、お母さんの実家とか親戚を頼って疎開をされていて、戦時中に疎開をしていなくても、戦後になって疎開をされたというのが、非常に興味深い話でした。

水田 富子さん

当時は、女の子はみんな髪にシラミが湧いていたんです。それで防空頭巾を被っていたんですが、痒くて勉強どころではなかったんです。いたずらで、防空頭巾をわざと取って投げたりしてました。頭にDDTを撒いていました。櫛でとくとシラミがポロポロ落ちてくるんです。寝ていても起き

ていても、痒くて痒くてたまりませんでした。学校から帰る時でも、空襲警報が鳴ると麦畑に寝転んで、B-29が通り過ぎるのを震えながら待っていました。子ども心にあの怖さは忘れられません。

司 会

ありがとうございました。あと、お一方だけ、ご質問なりご意見がありましたらお願いします。

佐藤 隆江さん

今日は広島から来ました。福山が燃えた日は、私は6歳でした。三菱の話が先ほど出ましたが、私の父は当時三菱の社員でした。空襲で354名亡くなりましたが、父がそのうちの一人です。私はその当時ウエスギの近くに住んでいたように聞いています。逃げてイモ畑にたどり着いたみたいです。メガホンを持ったおじさんたちが、「動くな！伏せろ！」と言われるんです。それで、伏せながらふっと見ましたら、たくさんの飛行機が来て、私の1~2mぐらいのところに、バラバラバラッと機銃掃射のような？焼夷弾じゃあないような？ちょっと記憶が曖昧なんです。もう少しずれていたら、私は生きていなかったと思います。逃げる時も街の中を、「あっちへ逃げろ、こっちへ逃げろ。」と言ってくださる方向へ逃げて、草戸のイモ畑に入ったような気がします。そのとき靴はなくなっていました。途中防空壕へも入ったんですが、母が「隣の奥さんがいらっしやらない。」と言って出たんです。そうしたらその後でドガンと落ちたようです。そこでも命拾いして助かったんです。それから夜が明けて、私は子

どもだからよく分からないのですが、駅前
に公会堂がありましたねえ、その広場には、
おすびが板の上にいっぱい並べてあっ
て、私もいただきました。そして母の実家
がある引野へ、母と一緒に逃げて行きまし
た。

戦後は、食べ物では、「糠団子」があつた
ことを聞いたような気がします。私は、食
べ物については全然記憶がないんです。ま
ずかつたとか、ひもじかつたとか、ずうっ
とそんな状況だったと聞いています。

司 会

時間がまいりましたので、心残りではご
ざいですが、終わらせていただきたいと思
います。

戦後 70 年の節目に当たって、未来の日
本・未来の広島県・未来の福山の市民や子
どもたちに、証拠遺産として言葉で伝える
ということ、形として少しでも残してい
こうというお気持ちが強く感じられました。

みなさんに集まっていたいただいた意義は、
たとえ今日発言はされなくても、そういつ
たところにたくさんあつたのではないかと
思います。今日お集まりの方は、平和を望
む気持ちが繋がっている仲間なんですよ。
その気持ちがまた次の機会と一緒に集まっ
てこういう話ができ、次々に子どもたち
にも伝わっていくんじゃないかなと感じま
した。仲間ですから、これからも一緒に手
をつないで、こういった活動を頑張ってい
きたいと思いますのでよろしくお願ひいた
します。

霞公民館長 渡辺 錬治

おかげさまでこのように盛大に会を催す

ことができました。福山が燃えた日、ちょ
うど 70 年前でございます。人間で言いま
すと古希です。人間でいう 70 年は長いん
ですが、歴史でいいますと一瞬だと思いま
す。本当に昨日のことにように思うん
です。ですから我々が明日のこと、つまり
今もみなさんが経験されたようなことが
世界では起きているということ、胸に浸
みさせて、平和を守っていかなければな
らぬと思ひます。

我々は平和を、今、そして次の世代へ
続けていくためには、本当に一人ひと
りがそういう気持ちにならないといけ
ないということが、今日のお話でよく
分かつたと思ひます。どうもありが
とうございました。

3 座談会：戦中・戦後の暮らし

と き：2015年（平成27年）7月12日

と ころ：旧霞幼稚園

出席者（町名は福山空襲当時）

枝広 稔 1937年（昭和12年）生まれ。神村町
江草 孝昌 1934年（昭和9年）生まれ。神石町
江木 吉江 1934年（昭和9年）生まれ。地吹町
森近 静子 1937年（昭和12年）生まれ。野上町
落合 照江 1929年（昭和4年）生まれ。呉市

司会：堀家 美智子

（ふくやまピース・ナビ）

今日は座談会形式でお話しいたします。一つのことだけというのは難しいので、太平洋戦争が始まった昭和16年くらいから終戦の8月15日までの4年間ぐらいの間、そのなかでお話しになれる、子ども時代の話や、後で家族から聞いた話など、福山空襲の当時、中心部にいなくても、見たこと、聞いたこと、感じたことなど、戦時中と福山空襲、終戦後の暮らしの3本でお話を伺います。



枝広：1937年（昭和12年）の9月生まれです。昭和14年から、父親は戦争に行っていました。国民学校に入るとき、ランドセルを母が買ってくれました。ランドセルは馬糞紙（ばふんし）で出来ていたようで、

赤と黒の2種類しかなかったが、雨に濡らさんようにしろと言われ、雨が降ると「デンプチ」をかけて通った記憶があります。

当時、沼隈郡神村に住んでいましたが、入学前に松永駅前写真屋で写真を撮り、戦地の父親に手紙を付けて送りました。祖父からカタカナを習っていたので、学校に行く前から親父と文通をしていましたが、昭和19年秋になると、父親がどこにいるのか分からなくなったんです。記憶に残っているのは戦地から来た絵葉書で、「世界で一番美しい夕陽の港がここだよ」と、マニラの絵葉書を送ってくれたのを子ども心にハッキリ覚えています。

食べるものは、お菓子なんかほとんどない、田舎の親戚に行くと、大事そうに引き出しの中から「よう来た」と金平糖を出してくれるのが楽しみでした。当時、家は百姓をしていたので、戦中戦後の食糧難のときも供出した残りの保有米があり、コメが物々交換でお金の代わりになりました。おふくろやじいさんやおばあさんが金の代わりにコメを使っていたのを覚えています。衣料も衣料切符があり、食料も配給制度がありましたが、肉はニワトリを殺すかウサギを食べるか、牛肉を買って食べたということはありません。魚は、自転車やリヤカーで売りに来たのをコメと交換に買って食べていました。

着るものも粗末なもので、学校へ行くときもほとんど草履（ぞうり）で、藁（わら）で作った藁草履。同級生で医者のお巡りさんの息子が戦後一番早くゴム草履をはいていたのがうらやましかった。雨が降ると草履が濡れるので裸足です。腰に草履

をぶらさげて、山道ですが、歩いて学校へ行きました。必ず学校へ行ったら「ご真影（しんえい）」に向かって礼をして、上級生の班長が、「第何班何名異常なし」と報告し、後ろについて校門をくぐった記憶がありません。

国民学校の思い出は、イモ畑の周りに丸い大きな木製の輪があり、高学年が、「これは飛行機乗りになるための練習だ」と言ってぐるぐる回っていました。体育の授業でやっていたので、大きくなったらこんなことをやるのかなと思いました。低学年はイモ畑の草取り。昭和19年秋頃からは、防空壕の中に逃げ込む練習もやっていました。

江木：私は昭和9年3月生まれです。2年生のとき、父が兵隊に行き、母と妹との3人暮らしをしており、家計を立てるのに母はよそ様の縫物をしておりました。着ものとか布切れとかを持ってこられるのを縫って、お金をもらったり食べ物をもらったりして生活をしていました。空襲のときは母と二人で家を守っておりました。妹は早く母の里へ疎開をしておりました。妹はちょうど幼稚園でした。私の家は学校の塀の近くで、今も暮らしをしております。そこが生家です。学校の講堂が焼け落ちるとき、母は「逃げない。お父さんが帰るときまで、家を守っておかなければいけん」と言うて、隣の洋服屋さんが逃げにゃいけんと言うたんですけど、母は逃げんと言ったので、私は隣の奥さんとおばあさんと一緒に連れて逃げてもらいました。道三川は今よりまだ広かった。逃げるとき、別珍（べっちゃん）の足袋をはいて下駄をはいておりました。

夏布団を川で濡らして、その後、下駄を道三川で失くしたので探していたら、「そんなもんでもええ、早う行かにゃ」と言うて叱られました。明王院に逃げんたんですけど、どうやって逃げたか記憶にはないんです。橋のたもとで水につかり、首だけ出していた人がたくさんいました。逃げとるときに、後ろの人に直撃弾が落ちました。その方は亡くなったと思いますが、私は前ばかり見ていきました。朝を迎えましたが、母は帰ってこないし、泣いた覚えがありません。昼前に迎えが来て、それで母の里に連れて行かれました。次の日に母は来ていました。母は焼けた後片づけに帰って行ったんですけど、私は行けませんでした。

小学校時代は、護国神社（今の体育館）のところへイモやら大豆を作りに、勉強をせずに行っていました。校庭にもイモがいっぱい植えてありました。学校が焼けたら、今度は西の小学校にお世話になって、二部授業で西の小学校へ通いました。

落合：私は昭和4年生まれです。竹原の女学校へ行きました。それが昭和16年です。学徒動員があり、呉の海軍工廠（こうしょう）の鑄造工場に行きました。鑄物です。不幸だったのが、鑄物を溶かして型に入れるとき、ひっくり返って、友達が火の上で転んで大やけどを負いました。みんなが泣きました。

食べるものは同じもので、夜中に空襲があり、寮が丸焼けになりました。逃げるのが精一杯でした。4,000人から学徒がいたんですけど、大きなまん丸の防空壕がつくってありました。それがみんな防空壕に入り、

みんなぎゅうぎゅうに詰め込まれて、私は入口付近にいたんです。そのとき爆弾が落ちたんです。そのときの爆風で、ものすごい砂ぼこりで。本当ならみんな死んでいるんですが、不発弾でした。

毎晩のようにB-29 が来て、避難しましたが、狩留（かるが）トンネルが防空壕代わりになったんです。出たり入ったりしていました。夜中12時ごろ、最後の1発で寮が丸焼けになりました。昭和20年の7月1日の空襲で。食事当番の二人が亡くなった。小さな空襲も入れたら17回ぐらいもあったでしょう。

生活面では、シラミやノミや南京虫に襲われて夜も眠れませんでした。シラミの行列で、「殺せ」言うても、「あんたがし、あんたがし」言うて。学校ではDDTで真っ白い髪になりました。

森近：噴霧機がないので、手でしていました。学校でしてもらうのは十分でない。家庭が裕福な子は、DDTを購入することができるから家で出来るからいいけど、学校だけの子は外から見ても頭が真っ白で。シラミの卵が付いているから。家でする子は、2度3度退治してもらえる。はじめは髪シラミだけでしたが、そのうち衣服にもつくようになりました。

衣食住ということから言うと、当時、モンペというのをはいていました。着るものは、衣料切符を中心に購入するんですが、どこの家庭でも、お嫁入り道具に着物を持ってきた「銘仙」というものを普段着に使ってました。その普段着を縫い直して、大人の着物で子どもものを2着作ったんです。

前に、更生団子のことを話しましたが、モンペという漢字はないんです。「カルサン」と言っていた。ポルトガル語です。カルサンは、上も下も布のひもで絞めていた。母が作ってくれました。兄弟が多くて、女の子ばかり5人いましたが、昭和9年生まれの姉から、昭和19年生まれの乳飲み子までおりました。母が夜なべをするのを私たちも手伝いました。銘仙は縦糸が弱く横に強い。だから横裂きになる。すねだけが裂けたりする。すね当てをして着ておりました。

更生団子は、この辺、福山にしかなかったんです。糠（ぬか）団子は、当時栄養失調でビタミンが欠乏していたため、更生団子とは別にありました。糠団子は口当たりが悪いので、サツマイモを餡（あん）に使っていました。更生団子は、イモツルとかイモの葉の粘りが出るので、糠は使わないで、少し粉を足して作っていました。緑とも黒ともいえない色。蒸すから色が変わる。当時食べるものがなかったのも、おいしかった記憶があります。食糧切符をもらって、今の国道沿いの久松通の交差点をちょっと東に行ったところに買いに行っていました。



江木：ほかに、大豆の搾りかすを配給でもらっていた。ご飯に入れて量を増やして食べていたんです。麦は、戦前は食べたこと

はなかった。お百姓さんが分けてくれなかったから。

枝広：戦時中は、弁当の下の方にコメを入れて、上に麦を入れていかないと、先生に叩かれた。「兵隊さんはそんな物食っていない」と。麦のない弁当を食べていた子は、隠して食べていた。コメがあっても、人前では食べられなかった。

正月には、学校からミカン1個とどんぐり菓子を2個くれました。途中で食べてはいけなと言われていたので、家で、こっちの方が大きいとか弟と喧嘩していました。昭和18年か19年ころの話。

江木：どんぐりは拾って学校へ持って行きました。供出していたんです。松根油いうんですか？採ったのを学校へ持って行った。学校から帰ってですね、それが遊びなんよ。松脂やどんぐりをとるのが、子どもの仕事じゃ思うて。

(司会)楽しいこともあったと思いますが。

枝広：ちゃんばらごっこというか、みんな陸軍大将やそんなものになりたい。そのために兵隊さんごっこでちゃんばらをやっていた。

江木：缶詰のカンカンに穴をあけて、糸を通して、「カッポン」言うてましたね、それに乗って遊びました。缶けりとか。

枝広：自分で木製の3輪車、4輪車を作って遊んでいました。莫塵（ごぎ）を引いて滑らせたり。

森近：主人は山南の出なんですけど、友達で順番を決めて、7人ぐらいで山へ行って雑木を切って、大八車に積んで、洗谷の坂を越えて草戸のどこかへ集荷場があったらしいが、今でいう子ども会みたいなものでしょうね。そのお金を学校へ供出していた。高学年がすることになっていた。それが今でも一番楽しかった記憶として残っていると言っています。友達が集まれば、語り草になっているそうです。

今の子どもたちは楽しさがわかっていない。自分たちで遊びを見つけることが楽しいのにと、言っています。

江草：生まれが神石高原町です。家は農業で、サツマイモの話があったが、高系4号という品種をみんなで植えていた。味は悪い、でも、収穫量が多い。それを供出する。ひどい時は種イモいうて、つるを作るんですが、それを食べた。いいところは供出して、家は粗食だった。供出優先。

枝広：残りが保有米いうて、自分らで自由にできるんです。生活はひっそりしながら、夏祭りがあるとか、親戚へコメを持って行って喜ばれた。コメはあっても自由に食べさせてくれなかった。

江草：何月何日にはトラックが来るいうて、そこまで運んで行く。戦時中はなんにしても厳しい。

枝広：政府は、「一反で4石作れ」と言ってきましたが、昔はよっぽど丁寧で、熱心にし

ないとできない。普通3石ぐらい。品種を変えればいいのか、そういう苦勞をした。イモの供出は目方で。大きいのを入れて供出するため、よくできたものを入れた。

家の中に穴を掘って、供出以外は一年間食べられるようにしていた。イモ壺と言っていた。

卵とコメが金になる。遠足や運動会など、学校行事のときは食べさせてくれた。

江草：遊びは兵隊ごっこ。兄が学校でラップ手をやっていた。そのラップを持って帰って、二手に分かれて、こっちの山とあっちの山と。ラップ吹いたら戦争始めで、藁草履(わらぞうり)で山の中を走るんです。山を走るの慣れたもんです。武器は竹の棒でやるぐらいで、けがをせんようにしていた。時代劇みたいな感じ。危害は加えない。

昭和9年生まれですから、国民学校の第1期生で、新制中学の第1期生。学校では、炭窯を作って、生徒が山に木を切りに行く。薪を担いで帰って、学校で切って炭にする。自分の体に合った木を探して、切って持って帰る。勉強が一番していない時期です。

(司会) 福山空襲当日の話にしましょう。当日はどこにいたと話してからはじめてください。

枝広：空襲の夜は、神村にいまして、縁台へ出て、じいさんが、「福山が燃えよう」と言ったのが11時前ぐらいかな。赤坂、神村まで銀紙が風に吹かれて飛んできた。東の空が明るく、「福山は相当やられとる」言

うて、じいさんの弟が福山にいたので、夜中からおにぎりを作って、重箱に入れて、「キリザメ」いうたかな、重箱より大きなものだが、ふたが付いていて、じいさんがそれを持って、夜中の2時過ぎに、2人で赤坂の駅の裏のほうを歩いて、明王院に来たころには、もう明るくなってきた。そのとき、じいさんが「お城がない」と言った。芦田川を渡って草戸のほうへ来て、野上のあたり、全部焼けて何にもない。草履を履いて歩いたら熱くて歩けなかった。人に聞いて探したら親戚の二人は元気で会えた。芦田川の水で手を洗って、おにぎりを食べました。夜中から歩いてきつかったことと、福山はもう駄目じゃなというのを子ども心に思った。

江木：私は地吹町です。隣が道三町、向いが四丁目。そこで空襲にあいました。今も住んでいます。川を渡って逃げました。明王院へ逃げて行って、朝8時過ぎころ、どこからかおにぎりをもらって食べて、10時過ぎに里から迎えが来たので、里にいたんです。母が帰ってきたのがあくる日。どうやって帰ってきたのか知らんです。

(司会) 混乱のなかでも、探せば会えるものなんですね。

江木：「何々さんはあっちのほうで見たで」言うて。町内会から連絡先が調べてあった。地吹町は明王院に逃げる言うて、避難場所が知らせてあった。それですぐ迎えに来ました。話し合いをしてあったんです。

古谷：福山市民6万人と言われているが、中心部は3万人と言われている。昔は子どもが多い、親戚が多い、今と違う。その当時は携帯も電話もない時代だが、「誰々さんが倒れとって」言うてすぐ連絡がいく。横のつながりがよかった。組内の結託がすごかった。

枝広：お父さんが戦地に行っている家は、幼稚園も分かれていた。この辺は村上幼稚園その向こうへ白鳥幼稚園。ぼら公園の向こう側。お父さんが戦地に行っている家庭の子どもはそこへ行くんじゃない言うて。今の御門町にあった、芙蓉会館。その並びにあった幼稚園。

(司会) 避難場所や避難経路がはっきりしていて、訓練もよくできていたんですね。

江木：週1回練習していた。防火訓練、バケツリレー。婦人会いうて割烹前掛けをして、竹槍をもってね。強制的に練習に行ってた。睨（にら）まれるんです。だからまじめに行きよった。熱でも出たら、「出られん」言うて歩かになんかじゃなかった。

森近：防空壕へ焼夷弾が直撃しました。女の子ばかりだったので、父が屋敷の中へ3畳間ぐらいの防空壕を作ったんです。栗の八分板、2センチと5ミリぐらいでしょうかね。田んぼの際に焼夷弾が落ちました。父が「やられた～」と言って、頭から滑りこんできたのを覚えております。八分板だったから助かった。みんながバケツで水を持ってきてくれた。不発弾だったから燃え

なかったが、「シュシュシュー、ドーン」いうて怖かった。野上町二丁目は落ちてないんですが、うちの家だけ落ちたんです。「先祖を大事にしなくてはいけない」と、仏様を持って入っていました。7人そのなかに入ったんです。

(司会) 戦後の話。疎開した話がありますか。

江木：瀬戸の親戚の所へ疎開しましたが、本家から木をもらって、すぐバラックを建てて出て行きました。母の兄と二人でバラックを建てて、母と二人で入りました。その年のうちには今のところへ帰ってきました。うちは川のほとりまで畑をしていた。空襲の後、かぼちゃがよう焼けていて。10月には帰ってきました。曇もないし、筵（むしろ）を敷いて。親戚に迷惑をかけてはいけないということ。

枝広：悪いうわさも流れた。戦後成金が、家の持ち主が遠くへ行ってしまうと、うちの土地じゃ言うて取ってしまうとか。よその土地を、うちのんじゃない言うて取ったという話を聞いた。だから、自分の土地を守るために早く帰ってきたということもある。

江木：保険をかけた。10円の火災保険を、早く帰らんと受け取れんという理由で。

(司会) 戦後、戦争が終わったなと感じたことはなんですか。

森近：福山市は復興が早かった。肝っ玉母

さんもおれば、男性も力を蓄えたものを出して。福山市は早かった。みなバラックでしたけど。わが家には、一時、親戚が、遠い親せきも含めて、焼け出された5世帯が住んでいたんですけど。電話の復旧も早かった。

枝広：41連隊があったから、道路整備がよかった。行軍するために、連隊から芦田川に向かって、御門町から古野上町まで行軍しました。上水道も早かった。そういうのが復興の役に立った。

江木：区画整理員が作られたため、復興が早かった。区画整理員は、市議会議員になったんです。

枝広：昭和25～26年ごろかな、朝鮮動乱が起きたとき、食べる、着るという面で初めて落ち着いてきたようだ。

(司会)：ありがとうございました。

4 福山空襲と戦時下の暮らし

高石 朝美（ともよし）さん

1933年（昭和8年）生まれ
と き：2014年（平成26年）10月7日
と ころ：福山市人権平和資料館

1 戦時中の学校制度

- ・5, 6年生は農繁期には農家の手伝いに行く。
- ・砂場の砂を補充するために、各家庭で袋を縫ってもらい、芦田川で砂を詰めて持ち帰った。
- ・グラウンドを耕して畑を作って、サツマイモやダイコンを植えていた。肥料は学校の便所のものを使ったり、道路に馬糞拾いに行っていた。
- ・昭和19年ごろには教科書が作れなくなり、上級生のものを借りて使っていた。借りられない者は、親が手書きで写していた。
- ・5年生になると手旗やモールス信号を習った。上手な人がやると全く分からなかった。時々、テストもあったが、自分のしか判読できなかった。
- ・教育勅語を宿題で書かされた。覚えて来いと言われた。（軍人勅諭も、海軍は覚えなくてよかったが、陸軍は覚えなくてはならなかった。）
- ・国語は音読で、近所からも声がよく聞こえていた。5, 6年生のころカタカナ語は禁止されたが、コップ、ゴム、パンは使ってよかった。英語ではなかったのかもしれない。
- ・食べ物がなく、コメもなく、野菜もなかった。農家の子どもは白飯だが、非農家は麦飯で、お百姓さまさまという感じだった。卵やかまぼこはごちそうだった。

お金持ちの子が持ってくると、うらやましかった。

- ・小学2年生のころ、汽車が踏切で止まっていたのを、指さしながら車両の数を数えていたら、上の兄から「スパイと思われる」と、叱られた記憶がある。

2 軍隊について

- ・私は10人兄弟の9番目（6男4女）。一番上の兄が、シナ事変（日中戦争）に出征した。
- ・3男は、昭和19年に20歳で陸軍に入った（強制）。入営後、中国大陸へ渡り、終戦を大陸で迎えた。戦後の後片付けをしたため、1年後に帰国した。
- ・4番目の兄は、海軍へ志願（中学校2年生で受験）したが、肺活量不足で、海軍飛行予科訓練生の試験は落ちた。一度落ちると二度と受験できない。翌年、海軍の水兵になった。
- ・上の姉の夫は、警察官で朝鮮半島へ渡った。下の姉の夫は、軍属（事務方）として満州へ行った。上の姉の夫に召集令状が来たので、姉は妹を頼って満州へ行った。朝鮮半島では、バスなどに乗って日本人が立っていると席を譲ってくれたが、終戦後、バスでも汽車でも、日本人は降ろされ収容所へ入れられた。
- ・軍隊では、銃剣術（銃に短剣を付けて）といって突く練習をしていた。下手な兵隊は夜にも練習をさせられ、上官の許可が出るまで泣きながらずっと練習をさせられていたそうだ。
- ・海軍では、失敗すると天井からロープで逆さづりにされ、「海軍精神注入棒」で尻を叩かれた。虐待で死亡すると、家族へは病死と報告していた。この海軍精神注

入棒は、東郷平八郎が部下を棒で叩いたら、部下が良くなったことを機に広まったもの。

- 一番上の兄は、中国で輜重兵（しちょうへい）といって、武器や弾薬を馬に乗せて運ぶ役目をしていて、ある日、馬を引いて歩いているときに 100 人ほどの中国兵に見つかり、命からがら逃げたという話をしていた。歩哨兵を見張りに立たせるが、一人で立たされるので、野ウサギが前を走るのでさえ怖くて、転げたそう。
- 4 番目の兄は、人間魚雷「回天」の乗組員に命ぜられた。上官が兵隊を並ばせて、後ろから肩を叩かれたものを選ばれる。兄はまだ若かったので、「若いから、また今度にするか」と言われたが、イヤといえる状況ではなく、「ぜひ行かせてください」と答えたそう。その後、訓練中に終戦を迎え、外地には行っていないので、1 カ月くらいで帰ってきた。
- 学徒動員というものがあり、私より 2 級上の人（中学 2 年）は、命令で「〇〇会社へ行け」と言われた。
- 中国や朝鮮などの外地（戦地）へ行った人は、終戦後も 1 年くらいは戻って来ることができなかった。

3 戦時下の暮らし

- 一般家庭は、天皇陛下の写真（馬に乗った上半身の写真など）を玄関へ置いていた。置いていない家庭は、共産主義者とみなされた。
- 自転車は一家に一台あったが、ゴムがなくなり、パンク修理ができなくなった。修理方法として、麦わらを巻いて走っている人もいた。通勤は、4 km 以上でも、

ほとんど徒歩だった。電話機は、商売家か金持ちだけで、扇風機もほとんどなかった。

- コメは配給制。米穀通帳に〇人家族と書いてあり、その人数分だけ売ってくれる。闇ゴメを見つかりと没収された。
- 電気も不足気味で、昼間は家庭には電気が来なかった。お金を多く払えば、その家にだけはきた。晩もろうそくを使うことが多かった。
- 兵器を作るために金属供出があったが、対価はくれない。金属でできた格子や寺の釣鐘まで供出した。
- 呉へ行くことがあったが、重要な軍事施設なので、汽車が呉に近づくと憲兵が（鎧戸）を全部閉めさせた。船を見せないということだろう。
- グラマン戦闘機が何度も機銃掃射をしたというが、私は一度しか経験していない。20 機くらいの編隊で、機体が数センチくらいの大きさに見えるところを飛んでいたが、「バリバリ」というものすごい機銃の音がした。「敵機来襲！」と言うと、日本人はみな逃げたが、朝鮮の人は気にせず歩いていて襲われた。空中戦を行うため、地上の小銃の 4 倍くらいの銃弾であった。同級生がその弾を持っていたのがうらやましかった。
- B-29 は高度 1 万メートルのところを飛ぶが、日本の飛行機はそこまではあがらない。しかも、高射砲は 2000 メートルまでしか届かない。ある日、2 機の B-29 が戦闘機の護衛なしに低空飛行していたが、高射砲を打っても届かなかった。
- ある日、「ドーン ドーン」という音がした。何だろうと思っていたが、呉空襲の時の高射砲の音だと聞いた。60 キロメー

トルくらいは音が届くらしい。

ているだけでも非難された。

4 福山空襲

- 家の近くに防空壕を強制的に作らされていた。土地がない場合は、家の床下に作った。今考えれば、理解に苦しむ。
- 空襲の時、母親にたたき起こされ防空壕に逃げた。母と兄と妹と私と4人だった。父は、消火のために外にいた。空襲の間中、怖くて外を見ることができなかった。爆弾の「ツーン」という風を切る大きな音が、何度も聞こえた。このときばかりは、本気で神仏を拜んだ。
- 翌朝、死体に莫塵（ごご）が掛けてあったのをのぞいてみたら、タバコ屋のおばあさんだった。半焼けになっているのが隙間から見えた。他にも道路の脇に無造作に死体が置いてあった。家が焼けてなくなったので、安置できず、戸板に乗せて道路の端に置いていたのだろう。みな、人のことには無関心だったのかもしれない。
- 空襲ののちも、何日も市内は燃え続けていた。「通り町（今の本通り）」から土橋までは建物疎開で家がなかったが、壊したままにしてあったので、燃え続けていた。
- 翌日、福山駅のホームにとうもろこしが山積みになっていたのが燃えていた。食べるものがなく、よだれが出たが、食べられるようなものではなかった。もったいないと思ったが、軍人も警察官も、燃えるのを黙って見ていた。
- 「伝単」を見ても逃げる者はいなかった。逃げるようなことをすれば、「それでも日本人か」と言われる。ビラをじっと見

5 終戦後

- コメと砂糖の配給は続いたが、塩は買うことができた。
- 2週間に1度くらい、町内会を通じて菓子の販売の案内があった。グリコや森永のキャラメルは当時からあったが、1箱10銭した。正月に貰うお年玉が20銭くらいで、貴重品だった。子どもの時に菓子を食べられなかったのがつらかった。
- 「更生団子」は、人が行列をして買っていた。塩も砂糖も入っていないまずいものだった。団子よりふわっとした感じで、パンのようでもない。食糧営団が販売していた。値段は覚えていないが、更生団子3個としじみ汁一杯が同じ値段くらいだった。

5 霞国民学校初等科訓導

松本 和子さん 当時 20 歳

1925 年（大正 14 年）3 月 30 日、藺町（いまち。現在の昭和町）生まれ

村上幼稚園 1 期生。南尋常小学校卒業。

1943 年（昭和 18 年）県立福山女学校 4 年生で卒業。初等科訓導の教育を受ける。霞国民学校に初等科訓導として勤務。1 年生女子組担任。

父は、当時 40 歳前半で、私が県女 1 年生の時、シナ事変（日中戦争）で 1 度目の応召。海南島にいたそうです。2 度目は下関で、福山空襲のときは家にいませんでした。戦後、早く復員しました。

○藺町（いまち）

家は木綿橋からまっすぐ南へ続く商店街で、大勝館（映画館）の手前にありました。近くに 2 軒の軍服店がありました。軍の御用達で、軍服の卸をされていました。

うちの前の道はいろんな人が通りました。兵隊さんが、41 連隊と練兵場へ行き来していました。兵隊さんは背囊（はいのう）を背負い、汗びっしょりで疲れて歩いています。営所が近づくうちの家の前から、足並みをそろえて歩きだします。足をあげてね。当時の道はバラスでした。将校は馬に乗っていましたので、チリトリで家の前の馬糞を集めました。



陸軍歩兵第 41 連隊正門

○南尋常小学校

南小学校は、街の学校だったので、郡部の学校の先生達が見に来られました。学区内には、軍人さんの家族がたくさん住んでおられました。小学校では、教育勅語が言えない人は、廊下に立たされたんです。また、花街もあって、東や霞、西の小学校とは様子が違っていたと思います。

子どもの遊びは、おしくらまんじゅう、石けり、縄跳びでした。食べ物になるものを取りに行くことも遊びでした。川口の五本松に、きれいな黄色のシジミを採りに行きました。いちぢくの木に小さな穴をあけている白い幼虫、蜂の子、イナゴ、タニシは佃煮や炒って食べました。イナゴは、紙袋に 2 日間入れて、糞をしてから、ドジョウはきれいな水につけて、泥を吐かせて料理しました。とにかく、戦争が始まる前までは、子どもは、家の人に「ご飯よ～」と呼ばれるまで、よく遊んでいました。

子ども会で、金属を拾い集めて、お金に換えて寄付したので、杉原陸軍大臣から表彰されました。うちは、手あぶりの火鉢を供出しました。おばあさんが国防婦人会だったので、神棚にあげていたお宝、たった 1 枚の大判金貨も金属供出しました。

○福山県立女学校

県女に合格しました。県女はいろんな決まりごとがありました。婦人雑誌を読んではいけない。帰宅は日が暮れる前でした。夜は出歩いてはダメということで、教護連盟がうるさかったんです。雨宿りで、軒下に知らない男の中学生と一緒にいても怒られました。

女学校は、本来5年制ですが、私の時から4年生で卒業。希望者は試験を受けて5年生の代わりに、国民学校初等科訓導の資格を取る教員養成の講習会で、1年間学ぶことになりました。それ以外の人は、勤労働員として、三菱の工場や三原の工場に働きに行くことになりました。

私は1期生で、60～70名はいました。講習会は、広島か三原の師範から先生が来られて授業を受けました。児童心理学などを習い、1週間か1カ月、東小学校で実地の授業がありました。私の1級上は、三原師範に半年通学したそうです。私たちの下の学年は、男の先生が次々と出征されるので、勤労働員として教員養成の試験に合格すれば、代用教員になれました。代用教員は、実地の授業はありません。早く教員を作りたいのでした。

○霞国民学校

昭和18年4月、私は国民学校初等科訓導になり、霞国民学校に配属されました。服は、県女の制服を直してもらいました。スカートをキュロットに、セーラー服を開襟の上着にしてもらって通勤しました。靴は、大阪の靴屋から革靴を取り寄せました。私の初任給が35円で、革靴が37円でした。

1組59人で、1学年4組でした。私は、1年生女子の担任でした。幼稚園に行っただけから小学校に入った子は3分の1で、少なかったです。だから、集団生活をすることがない子ばかりで、教えるのは大変でした。でも、子どもたちの目は輝いていました。私の調子が悪いと見抜きました。子どもたちは、草履をはいていて、ズック（布の運

動靴）をはいている子はいませんでした。はいていても、そのズックは破れて指が出ていました。霜柱が立つ冬の校庭の朝礼は、軍事教練が終わると、子どもたちの足跡がくっきりとついていました。

警戒警報が鳴ると、子どもたちを班ごとに自宅に帰します。帰宅途中や野外の畑仕事中に爆撃されたらと思うと、怖かったですよ。私は体の小さな1年生を背負って走りました。荷物は別の子に持たせました。大阪のほうへB29が編隊を組んで飛んで行くのを見ると、水晶のようにキラキラと光ってとてもきれいでした。

5、6年生は、授業で芦田川の土手にサツマイモを植えていました。食糧増産のため、サツマイモに電気ショックをあてるとよくできるかどうかの実験をしました。茎の切り口に電気を通すんです。ばかげているけど、教える先生は本気だったんです。学校には、農作業に使う大八車が26～28台くらいあったかと思います。

○福山海軍航空隊

昭和20年夏、代用教員のS先生が来られ、「私が責任を持つから、お嬢さんを貸してほしい。大津野の予科練の方が、『若い女性と話をしたい』と言っておられるので、私と小林旅館と一緒に泊まってほしい。」と、言われました。予科練の方は、東京出身のSNさんでした。少し話をしただけで、何の話をしたか覚えていません。私からは何もしゃべらなかつたと思います。「男女席を同じゅうせず」でしたから。

しばらく後、SNさんが家に来られました。「最後のあいさつに来ました」と言われ

ました。「ああ、特攻に行かれるんだ」と思い、何か食べるものをあげたいと思いましたが、食糧難で何もありません。他に何かと思いましたが、家は建物疎開と決まり、家財は疎開させ、畳は上げて2枚を三角に合わせている状態でした。とっさに、私の四つ身の着物を着せていた市松人形を差しあげました。そのときは、「男だったら、予科練の方に付いていきたい」気持ちでした。出発されたとき、家の上を飛行機で旋回して行かれました。



福山海軍航空隊 海軍礼式「帽振れ」

その後が気になって、同級生が大津野飛行場に学徒動員で勤めていたので聞きました。「その人は出撃されなかったのでは」と言うので、生きておられると思いました。

何十年もたって（昭和52年8月）新聞に、予科練の方（特攻隊零観隊中隊長の椎根中尉）の遺族が、お世話になっていた小林旅館に尋ねてこられたと書いてありました。それで、あのとき、大津野飛行場から9機が出陣し、3機が無事だったと知りました。もしかしたら、生きておられるかもしれないと、ずっと思っていました。

このたび、調べてもらったら、SNさんは戦死されたと知りました。

○福山空襲

藪町が建物疎開になることになりました。強制的に家が壊されるんです。

家の裏庭に、3本の桐の木がありました。私が生まれたとき、お嫁に行くとき箆笥が作れるよう植えました。でも、建物疎開のため、木を切り、疎開させました。

8月7日か8日だと思いますが、昼間、学校の防空壕に入っていたら、「8月6日に広島のカスタンクがはじけた」と聞きました。

8月8日、私は母の里へ荷物を疎開させるために、学校の大八車1台を借りました。大八車は、リヤカーよりたくさんの荷物を載せられるんです。学校から帰って、夕方出発。祖父と私と弟は大峠を通過して、千田の三軒家に行きました。妹とお祖母さんは、リヤカーを押して、通り町、奈良津の道を通ったので、私たちより遅れてきました。

空襲警報が鳴りました。最初に照明弾が落ちて、パーッと明るくなりました。焼夷弾が落ちました。「焼夷弾が落ちたぞ」の音が聞こえました。それで裏山に登りました。木之庄の高射砲が2~3回、ボンボンと撃つ音がしました。高射砲は撃つけれど、弾が低い円弧を描いて落ちて行くだけです。お城が「とんど」のように焼け落ちるのを見ました。「福山はもうだめじゃ」と思いました。

先日、弟に空襲のときのことを聞いたら、「風呂に入って帰れと言われたので、助かった」と言いました。私はすっかり忘れていましたが、風呂に入らず早く家に帰っていたら、空襲にあっていたでしょう。

8月9日、夜が明けてすぐ、藪町の家に向かいました。大峠の坂の上で福山を見た

ら、一面廃墟で、煙と熱気で霧のようにくすぶっていました。家の大きな松の木を目標にするつもりでしたが、家は丸焼けで、場所が分からないんです。根石が赤く焼けてボロボロでした。写真屋さんの防火用水の中で、家人が一人亡くなったと聞きました。

それから、霞小学校へ向かって歩き出しました。なるべく平たいところを通って、物をよけよけ歩きました。誰も歩いていませんでした。ズックの底がブスブスいうほど、まだ熱かったです。中央公園には休憩所がありました。そこへきれいな女の人が倒れていました。一目には無傷でした。声をかけようかと思いましたが、怖くてできませんでした。

今のK散髪屋さんから南へ入ったところに村上幼稚園がありました。その途中に、道三川に流れ込む川に橋がかかっていました。歩いていたら、その橋の下にたくさんの人が見えました。覗いたら、プウと膨らんだ遺体でした。土だらけでむごかったですよ。知り合いのご家族で、小さな子どもたちと、そのお母さんたちでした。あの時の様子を思い出すので、当分そのあたりは通りたくないし、通れませんでした。

霞町のにぎやかだった通りの電線に紙屑か何かピラピラしているので、よく見たら、人間の片腕がぶら下がっていました。藪町より霞町のほうが臭かったです。あの臭いは一言では言い表せません。空襲の後、芦田川に遺体を運んで焼いたんです。

まだ7時前だったのでしょう。丸焼けになった学校に4~5人の先生が集まっていました。

宿直は、男の先生4名でした。空襲警報が鳴ると、霞学区の消防団が集まってきました。先生が防空壕に入っていると、団長さんが、「先生、消防団が逃げるときは、一緒に逃げてくださいよ。そうまでして学校を守る必要はない。」と言われたそうです。団長さんは、「防空壕に入るな、逃げろ」と言って、近所を回られたそうです。このたび、空襲で亡くなったと聞きました。

校庭は、2~3メートル間隔で、大きな穴があいていました。世話をしていた山羊の小屋に行くと、鍵がかかっている、焼け死んでいました。

学校の大八車は、私がたまたま借りた1台が残りました。それが、片付けや西小学校への引っ越しに役に立ちました。

うちの家財を預けていた親せきのコンクリートの倉庫は、10センチのコンクリートの壁でしたが、10日か2週間後に開けると、米は蒸し米になっていたそうです。

○戦 後

私は勤務中に、子どもの親が戦死したことは聞いたことはありません。父は応召から戻ってきました。市役所の復興課で、区画整理やお城の再興を手がけました。

藪町は、区画整理で幅の広い国道2号がつけました。胡神社は、北の大黒町に移されました。

昭和21年3月、私は、パラチフスになりました。パラチフスは隔離されます。そんなことになったら大変です。それで表向きは肺炎にして、1か月停職しました。パラチフスの養生は、絶食してブドウ糖の注射液を飲みました。このたび、福山市が隔

離都市になっていたと聞いて驚きました。

が熱くなることもありました。

営所（41 連隊）の焼け残った建物に、学校や役所だけでなく、文化洋裁学校ができました。私は洋裁を習いに行きました。

青年団で「番場の忠太郎」の劇をやりました。男女 30 人～40 人ほどで、慰労会の出しものでした。

夜、練習の帰り道、松浜の家まで同じ方向の男の人と歩いていました。私は浴衣を着ていました。そのとき、ジープに乗った進駐軍 2 人に呼び止められました。当時、「進駐軍が女を襲ってくる」という噂がありました。私は、ジープを見た途端、走り出しました。ジープが追いかけてきたので、こわかったです。家の裏口に何とか飛び込みました。父が片言の英語で話をして、追いついてくれました。今思うと、浴衣が珍しくて追いかけてきたのでしょう。

○現 在

私は、今まで戦争体験の話をしたことがありません。ピース・ナビの方に話そうと思ったのは、この先何年も生きていないと思うし、戦争体験者で生きている人たちが少なくなっていますから、2度と戦争を起こされては困るんです。なぜ戦争になったのか、あの戦争はどんなだったのか知りたいんです。憲法を守ってほしいのに、戦争になったら国は助けてくれません。戦争中は、女と子どもだけだったけど、隣近所協力してたでしょう。

今回、お話をするのに、昔の教え子や弟たち、従兄弟、友達、同僚にも尋ねました。気になっていたいろんなことがわかって、よかったです。忘れたことを思い出し、胸

6 戦災の想い

開原 則二さん

1937年（昭和12年）9月30日生まれ
福山空襲当時9歳。霞国民学校2年生。紅葉町に住んでいた。1945年（昭和20年）8月8日の空襲の夜は、家で寝ていた。

○空襲の様子や避難経路、避難の途中で聞きしたことなど

若い男性は出征していたので、残った男の人が、空襲警報が鳴ったら近所の見回りをしていたため、父（37歳）は留守だった。

母（33歳）が5歳の弟をおぶって、9歳の私の手を引いて、近くの妙蓮寺に逃げ込んだ。板壁の穴のあいたところから外に出て、線路をつたって、輛鉄道の野上駅に着いた。野上駅には、多くの人が逃げてきていて、防空壕にも十分な避難場所がなく、母が入れてもらうように頼んだが、「一杯だからだめだ」と言われたので、荒神さんをめざした。その後、野上駅の防空壕にも焼夷弾が落ちて、焼けた。もし、そのまま、野上駅にいたら、大変な被害にあったのではないかと思う。

母と弟と私は、荒神さんから淀川へ着き、飛行機が通り過ぎるのを水につかって待ってから、芦田川を渡り、暗闇の中を明王院へたどり着いた。福山城は燃えていたが、明け方、お城が崩れ落ちる音がした。

朝になって、明王院では、炊き出しの「大きなおにぎり」が配られた。大人も子どもも「同じ大きさのおにぎり」だったので、弟も私にも「大きなおにぎり」が配られた。

「大きなおにぎり」をもらって、何か得したようで、嬉しくて、とてもおいしかった。

おむすびを食べたあと、住むところを探して、親戚の家を訪ね歩いた。瀬戸町のおじさんの家に行ったけれど、おばさんから、「主人が出征している間に勝手なことはできない」と言われ、沼隈の山南の母の親戚の家にも行ったが、おじいさんに、「もう自分の代ではないから」、おばさんにも、「主人が出征しているので、勝手なことはできない」と断られた。いくら親戚でも、突然のことなので、断られるのも無理はないと思った。

その後、松永の柳津にある母の親戚の家に行った。朝、大きなおむすびを食べていたので、ずっと歩くことができた。柳津の親戚では、「おじさんが帰って来て、もしも、出してくれと言われたら、すぐに出る」という条件で、なんとか、近くの薪小屋に住むことを承諾してもらった。

その後、親戚の家で、家族の消息を尋ねてきた父と会うことができた。借りた家で、5年生までお世話になった。1年間は別のところで過ごしたが、柳津小学校を卒業した。

○戦争中の毎日の生活の様子(食事、学校、仕事、日々の備えや当時の戦争観など)

戦時中のことで忘れられないのは、配給をもらうために並んでいたとき、上級生が脚絆を巻いて並んでいるのを見て、自分も脚絆を巻きたくて、早く3年生になりたかった。(脚絆は3年生から身に着けられた。) 憧れだった。

8月15日、終戦の日、近くの牛小屋の前に集められ、近所のみんなで、ラジオから流れてくる放送を聞いた。敗戦で、「これからどうなっていくんだろう？」と、不安だ

ったことを覚えている。

父は、体があまり元気でなかったが、近くの下駄工場(木工所)で働いた。

住んでいた薪小屋は、小高い山の上にある、学校へも仕事へも、毎日上がり降りの生活だった。日照りで水道が出ないときは、私が、山の上の井戸まで、水を汲みに行っていた。体が小さいので、大きな桶に水を汲んで歩いていると、みんなから、「桶が歩きよる」とからかわれた。しんどかったけど、そのおかげで、私も、病弱だった父も元気になったと思う。

学校の帰りに、学校の近くにあった親戚のおばさんの家に寄って、昼ご飯を食べさせてもらった。子どもだから、ごちそうが食べられるのがうれしくて、毎日学校の帰りに寄っていたら、ある時、「毎日、来るもんじゃない」と叱られた。おばさんにしてみれば、食べるものがない時代に、たまったものじゃなかったんだね。

食べるものがなくても、「いくら親戚でも、甘えてはいけないんだ」と、子ども心に思った。いろんなことを考えると、それからは、親戚のおばさんの家に行けなくなった。

食べ物は配給だけでは足りないので、母が、農家へ着物を持って行き、麦などに代えてもらって、物々交換していた。「かんころイモ」というサツマイモを干したものを煮て食べていたし、菓子箱一杯の「ビービー」を食べていたこともあった。

柳津に疎開しているときに、一番つらかったのは、食べものがないことではなく、弟が病気で亡くなったことだった。弟は、祭りの練習を見て、自分も一日中やっていたためか、その晩、熱を出した。母がお医

者さんと呼ばれに行ったが、来てもらえず、弟は亡くなった。「しょうこう熱」だったらしい。かわいそうだった。

昭和 21 年に祖父が亡くなり、残された祖母は、大変だったんだらう。祖父の亡くなった実家を頼るわけにもいかず、柳津で長く生活することになってしまった。小学校を卒業して街に帰って来た頃、父の兄弟も一緒に住んでいたため手狭だったので、空襲の頃に住んでいたところは区画整理があり、近くに家を建てて住むことになった。(現在の 2 号線の近く)国道 2 号線のために整地されている空き地の野原を「野っポンポン」と呼んで、よく野球をして遊んだ。グローブはなく、「帆布(はんぷ)」という、中に綿の入った布地のグローブのようなものを作ってもらって、友だちと野球をしていた。楽しかったよ。

昭和 25 年に、第 4 校(鷹取中学校)へ進学しました。当時、福山には、東中学校、城北中学校、城南中学校、鷹取中学校の 4 校の中学校があった。

早くに社会人になったが、もし空襲も戦争もなかったら、もっともっと勉強して、自分の好きな道を歩みたかった。

7 戦時中の学童の日々

三鼓（みつづみ）照子さん

1933年（昭和8年）2月5日生まれ。横尾町在住（横尾駅前）。千田国民学校6年生の時の体験。

1クラス40数人おりました。全部で700人くらいかな。毎月8日の日は、学校にいかず、8時に八幡さんへ行き、武運長久を祈ります。冬の日も素足で行く。それから、学校で1時間ぐらい校長先生が戦況について訓示をします。

学校では、松脂（やに）を採りに行きました。私は、今の向陽団地の山の担当で、5人が1グループで山に連れられて行き、松の木の下にV型に線を入れて、竹筒にためて、朝採りに行くんです。それを学校に持って行く毎日でした。

食べ物はな。コメはな。麦があればいいほう。配給制で、道や土手で草を採ってきて食べました。ナヅナ、ヨモギやポンポン（イタドリ）と言いましたかね。豆腐屋でおからを絞ったのを並んで待ってわけもらった。おからご飯というのを食べていました。コメではない、麦や小麦の皮（こかわ）を食べました。味付けもない。どこもかしこも開墾していた。南京を植えていた。それが主食の人も多かった。サツマイモは上々でした。

校庭の防空壕は30人ぐらい入れるかな。

大阪から集団疎開の子が来ており、その子が入ったのではないかな。私自身は入ったことはありません。

福山空襲のときは、我が家の防空壕に入りました。横尾は燃えませんでした。

毎日、学校でも町内会でも、今日はどこがやられたという話題がありました。今日は岡山がやられたんかな、というような感じでした。

食べることに逃げるのが大事。毎日、ピリピリしとった。

大都市が空襲にあつてから、地方都市の順になるが、暑いころ、7月に入ってからかな、ラジオがないから、近所で聞くと、毎日B-29の話ばかり。今度は福山じゃ言うて、毎日ピリピリしとりました。夜9時過ぎかな、福山に照明弾を落とした言うて、隣のおじさんがおらんじゃったんです。枕元へ、履物とか夏蒲団みたいなものを置いておきました。それを持って防空壕へ入りました。あんまり恐ろしいからのぞいたら死ぬと思っておりました。「シャシャシャシャ」言うて、雨のように焼夷弾が落ちました。何時間か防空壕の中へおりました。

夜の11時30分ごろかな、福塩線の列車の音で時間がわかるんです。神辺から横尾の間が田んぼ。貨物列車が止まって、その田んぼへいくらか焼夷弾が落ちていました。横尾駅へ列車が入っておったら、この辺もやられておったかもしれません。

空襲ののち、バス通りをどこから来たのか、ゾロゾロぎっしり人が、まっ暗い中を布団をかぶって、道幅いっぱい北へ向いて歩いて行きました。あくる朝、福山駅はダメじゃから、横尾から電車が出る言うて、横尾駅へいっぱい人が来ました。お母さんが井戸の水を汲んでバケツにひしゃくを入れて置いておきました。いっぺんには列車に乗れんので、横にならしてくれ言うて来た人もたくさんいます。神辺の方へしか行かれんです。

(原爆被災者が福山に帰ってきたのを見た そうですが?)

原爆が落とされたのち、何日か経ってから、「広島に新型爆弾が落ちた」言うて話した記憶があります。1 週間の後かな、福塩線の 1 時過ぎか 2 時半ごろの十日町行きの列車が止まった時、ザザと大きな音がするので見ると、どんどん担架に乗った人をプラットホームに降ろしていました。担架を地面の上に置くんです。「広島で原爆にやられた人じゃ」と、係りの人が言いました。みんな白衣を身に着けておりました。「トイレへ行く」と言うて、二人で連れて行きましたが、原爆にあたった顔の半分が炭のようになっておりました。こっちから光がきたんじゃないだろう、鼻の半分が真っ黒になっておりました。ようよう歩けるぐらいでした。係りの人が「ここにおる人もそう長くは生きられん」と言いました。15, 16 人ぐらい。膿みのところへハエがたかっておりましたので、団扇であおいであげました。そこへ大型のトラックが来て、そこへ順番に並べて、「のとや (筵)」を薄くおおったものをかけて、「市村 (いちむら) の学校へ連れて行く」と言うておられました。広島からあちこちへ分散して連れて行かれたんですかね。それが 1 回きりでした。

※のとや (筵) : 薄いゴザのようなもの

新型爆弾と言いましたが、翌日には「原子爆弾」と言うておりました。日がよく照るほどやられる、白い服がいい。誰から聞いたかって、みんなそれとなしに言うておりました。多分学校で聞いたんでしょう。爆弾が落ちたら、耳と目は常にふさいで、伏せをしないといけなかった。親指で耳を

ふさいで、中指で目をふさぐ。

松脂をとらにゃいけん言うから、日本もいけんのんかなと思っておりました。あんなものを飛行機に入れられるんかと思っておりました。バケツリレーをしたり、竹やりもしました。飛行機が降りてきたら、竹槍で突く言うて訓練しました。

戦争に「勝つ勝つ」言うていましたが、終戦のあくる日、学校に招集がかかりました。学校の大掃除、飾ってあるものを全部取って、下のグラウンドの忠魂殿のそばで燃やしました。教室ごとにぶら下げてあるものを燃やしました。

戦後は、教科書を墨で消してくれ言うて、勉強する言うても帳面も紙もない、戦争の後始末をしたばかりで、よく覚えていません。

戦後、映画館は早くできたような気がします。美空ひばりが最初に出た「悲しき口笛」を日米館でしたのを見ました。昭和 25, 6 年ごろ。バラックの店が駅前に並んでおったが、復興は早かったように思います。

8 シベリア抑留 土井 茂さん

1924年（大正13年）11月25日生まれ
とき：2015年（平成27年）7月29日
ところ：旧霞幼稚園

※ 49頁に旧満州，旧ソ連邦地図，50頁にフルムリ地区・収容所所在地地図を掲載

○出征前は

呉市広町の第十一海軍航空廠（しょう）会計部人事係に勤務していました。この航空廠は，昭和16年に，広海軍工廠航空機部が独立し，隣接地に新設されたものです。昭和16年12月，人員募集に応募し，採用され，昭和17年1月，入廠しました。昭和17年に徴用令が施行され，自動的に徴用されました。昭和19年10月，在籍のまま，陸軍に入隊しました。

○出征のあたりからお話をお願いします。

現役徴収を受けて，当時の満州国濱江（ヒンコウ）省阿城（アジョウ）県にあった阿城重砲兵第二連隊に昭和19年10月21日に入隊しました。入隊の集合場所は，広島市の広瀬国民学校でした。

入隊日の前日朝，当時の西霞町に藤井医院があり，その前に町内の人々が大勢集まってくださり，宇田さんと私の出征壮行式をしてくださった。そこから駅まで軍歌を歌ったかな，日の丸の小旗を振って見送ってくださった。近所の人，プラットホームまで出て，姿が見えなくなるまで見送ってくださり，感激しました。

宇田さんとは入隊先が違っていたので別行動になりました。

汽車は途中警戒警報で一時停車したり，ノロノロ運転で広島に到着したのは午後3時を過ぎていたと思います。指定された旅館は「大和旅館」だったと思います。そこに泊まりました。翌日の21日の朝，集合場所の広瀬国民学校へ行きました。面接，身体検査があり，入隊が決定しました。私たちの入隊は，満州の原隊から将校と下士官若干名が引き受けに来ているんです。その日に軍装品を受領し，軍服に着替えました。新兵の誕生です。身の引き締まる思いでした。二等兵の襟章も同時に受領しました。襟章は宿に帰り縫い付けました。翌日の22日は私物を梱包して，郵便局に出向き，実家に送りました。混雑しており1時間ぐらいかかったと思います。途中は軍人に欠礼のないよう注意しながら歩きました。

23日，いよいよ軍人としての旅立ちの日です。緊張しました。広瀬国民学校で軍隊編成が行われ，私は第1小隊に編入されて，第1分隊長を命ぜられました。各自，小銃，短剣，雑嚢（のう），飯ごう，水筒などを受領し，午後，列車で広島を出発し，車中泊で博多に着き，24日朝，博多港から釜山（プサン）に向け出港しました。

船の中では救命胴衣の着脱の訓練をしました。玄界灘を過ぎた頃，突如空襲警報が発令され，「全員直ちに武装し，救命胴衣を着け甲板の出入り口で待機せよ」の命令が下りました。分隊員に落ち着いて行動するように指示し，救命胴衣を助けあって着け，甲板に一番近いところで待機しました。その時はすごく緊張した覚えがあります。お陰で警報が解除され，無事に釜山（プサン）に上陸でき，安堵しました。分隊長という

ことで緊張したからか、心配していた船酔いはしませんでした。その夜は、公会堂だったか広い部屋のコンクリートの床に菫（むしろ）を敷いて眠りました。寒かったことが記憶として残っています。

25日朝、釜山駅から列車で北上する。京城（ケイジョウ）、平壤（ヘイジョウ）を通過し、鴨緑江（オウリョクコウ）を渡り、鮮満国境の町、安東（アントウ）を26日に通過し、満州に入りました。

奉天（瀋陽・シンヨウ）、新京（長春）を通過し、28日の早朝、哈爾濱（ハルビン）駅に着きました。下車し、駅前に一同二列横隊に整列しました。駅前に忠霊塔がありました。将校が抜刀して、「頭中（かしらなか）」の号令のもと、敬礼をしました。街には人の往来もなく、静かな佇まいで敬虔な気持ちになりました。

これまでの車中では、軍人勅諭の奉唱、軍歌演習を行いました。平壤駅で受領した冷凍リンゴ1個は、アイスクリームの味がして大変おいしかった。あの味は忘れられません。朝鮮は禿山が多かったが、満州に入ると広漠たる平原に真っ赤な太陽が野末から上り、野末に沈む。大陸にきたなど実感しました。

再び乗車し、濱綏（ヒンスイ）線に入り、2つ目の阿城（アジョウ）駅で下車しました。阿城の第一印象は暗い陰気な感じがしました。空はどんよりと曇り、木枯らしが吹いて道はぬかるんでいました。現地人は無表情で我々の行進を見ていました。日本人には出会いませんでした。

2キロメートル程行軍し、部隊に入ると広い営庭があり、左側に二階建ての兵舎が

立ち並んでいました。引率将校が兵舎前で連隊長に申告し、編成が解かれて5泊6日の旅程を終えました。私の分隊長の任務は、隊員の掌握、命令伝達、糧秣（りょうまつ）受領の使役割り当てなどでした。全員が初対面の者ばかりで気苦労はありましたが、隊員の協力を得て無事任務を全うできて安堵しました。よい経験をさせてもらいました。

○初年兵の時代は

私は第1中隊第1小隊に配属されました。まず古年兵が我々と比べて頑丈な体格であるのに圧倒させられました。北海道、東北地方の出身が多くいました。兵舎内の行動はすべて早足でした。次第に冬の到来です。初年兵はほとんどが広島県と山口県の出身者で、温暖な地で育った我々にはことのほか身にしみました。

内務班では、ご多分にもれず古年兵からの制裁がありました。一般の訓練は小隊単位で、強行軍、匍匐（ほふく）前進、小銃射撃、銃剣術などでした。

重砲兵には、砲手、観測、通信、段列の班があり、私は観測班に配属されました。展望のきく場所を選び、そこに測量機を設置し射撃目標物と砲との位置の角度を測り、測板上で三角関数の計算法でいち早く射程距離を計算し、通信班に知らせるのが任務です。方体鏡、測量機を担ぎ、測板を背に雪の中を走り回った頃が、今は懐かしい思い出です。

初年兵教育は、2月末に無事終わりました。昭和20年4月に幹部候補生に採用されました。

○幹部候補生になったのは

中等学校以上を卒業し、配属将校の行う教練検定に合格した者は、受験資格があります。資格のある者は、全員受験したと思います。私もその中の一人です。

4月1日、幹部候補生に採用され、上等兵の階級に進みました。

連隊の近くに阿城重砲兵下士官候補者隊がありました。そこへ派遣され、1ヶ月間の集合教育を受けました。ここの成績で甲種（士官候補生）、乙種（下士官候補生）に分けられるんです。甲種に合格すると、内地の豊橋予備士官学校に派遣され、富士山のすそ野で砲の射撃訓練を受けることになっていました。卒業したら休暇がもらえ、故郷の家族に晴れ姿を見てもらいたいという願望もあって一所懸命に励みました。

5月1日、念願の甲種に合格し、兵長の階級に進み、原隊に帰り、合格者30人は別の兵舎で集合教育を1ヶ月間受けました。訓練内容は、砲手、観測、通信など、重砲兵全般にわたる訓練でした。

6月1日、伍長の階級に進み、原隊の第1中隊第1小隊に復帰しました。

○阿城では、現地の人と日本の軍隊とはどのような関係でしょうか。

阿城は、一時、都があった古い町で、城壁に囲まれたその中が、現地人の町になっており、そこへは入ったことがないと古年兵が言っていました。

軍隊は郊外に重砲兵第二連隊、第三連隊、独立第四大隊、独立第五大隊、独立牽引車

第11、12、13中隊があり、ソ満国境に配置された東寧（トウネイ）重砲兵連隊、穆稜（ムーリー）重砲兵連隊の要に位置した重砲兵の拠点でした。

我々の任務は、関東軍として満州を守ることです。満州鉄道をはじめ日本の企業や開拓団もたくさんありました。そして、そこには在留邦人がいました。これらを守るため、まずソ連の侵攻に対する防衛です。それから匪（ひ）賊から守ること、軍閥というか抗日分子の集団スパイ活動、破壊活動に対する警備を行うことでした。「王道楽土、五族協和」を唱えていましたが、日本の利益に重点が置かれ、現地人に負担がかかり、不満を持つものが多かったのではないのでしょうか。これは私の感じたことです。

※王道楽土：徳をもって、公明正大で公平な政治が行われている安楽な国

※五族協和：「和（日）、韓、満、蒙、漢（支）」の五民族が協調して暮らせる国

○終戦までに一年もないぐらいですが、当時の満州の状況は。

治安は悪かったと思います。初年兵教育が終わった3月初め、飲み水か食べ物からか、赤痢患者が多数発生しました。連隊は連兵休となり、軍帽に白い鉢巻を付け、約1カ月間、検疫作業に従事しました。抗日分子の仕業ではないかとの噂がありました。

5月20日、原隊の主力は一部留守隊を残し、朝鮮に近いソ満国境の間島省八道河（ハチドウカ）に陣地構築を命ぜられ移動しました。重砲は砲を備え付けるわけですから、たやすく移動はできません。その砲と運命を共にするのです。軍艦の戦いと同じです。

いよいよソ連との戦いが近いと思いました。

7月1日、我々甲種幹部候補生は歩兵に転科を命ぜられ、牡丹江（ボタンコウ）の近くにある石頭（セキトウ）予備士官学校に派遣されました。内地派遣の夢は破れました。重砲兵として教育訓練を受けた日々が虚しく思えました。気を取り直し、候補生30名とともに隊列を整え、阿城駅から列車に乗り、牡丹江駅で乗り換え、図佳（トケイ）線（佳木斯〈チャムス〉から図們〈トモン〉まで）で2つ目の石頭（セキトウ）駅で下車。10キロメートル程行進し、入隊しました。そこには全満州からと北支の一部、朝鮮の北部から甲種幹部候補生が入隊しました。定員は3,600人でしたが、途中病気になり落伍者が出て実際には約3,400人だったようです。その中に我々のような砲兵、工兵、輜重（しちょう）兵からの転科兵も多く含まれていました。私は第2中隊第3区隊に配属されました。

営内では行動はすべて駆け足でした。朝の点呼後、校門北側の台地にある土道神社を参拝しました。就寝前には、修養録に反省文を書くのが日課でした。訓練は匍匐前進、戦車の下に飛び込む練習。戦車がないから、大八車を押して来る下へ飛び込むんです。それから夜間の挺身斬り込みの訓練もしました。

8月1日、軍曹の階級に進みました。

8月9日、ソ連が満州に侵攻してきました。

○自爆という意味ですか。

爆薬を抱いて突っ込むんです。戦車の下に入ったときに、ちょうど爆発するように。

肉弾戦ということ。一兵士として自爆せよということ。特攻隊です。

○入隊後、日本が危ないと思った時期は

それは7月1日に重砲兵から歩兵に転科し、それまでの訓練が無駄になり、石頭予備士官学校に入校したときです。そして学校での訓練が指揮官としてではなく、一兵士として対戦車への肉攻訓練が主だった、そうした時期です。

○8月15日の玉音放送は

8月20日、敦化近くの東沙河沿（ヒガシサカエン）というところで大隊長から玉音放送の内容伝達があり、明日武装解除とのことでした。ここで、初めて日本が戦いに敗れたことを知りました。夕暮れだったと思います。その日は、アンペラ小屋に分宿していましたが、敗戦のショックで目が冴えて眠れませんでした。21日に各自が自ら武装解除し、銃、剣を一か所に集め放棄しました。

※アンペラ小屋：箆（むしろ）を掛けただけの簡単な小屋

○8月9日から20日までの約10日間の様子はどうでしたか。

8月9日、ソ連が侵攻してきました。午前3時頃、非常呼集により全員が校庭に集合、学校長小松大佐の訓示がありました。ソ連の侵攻を告げられ、「諸君は原隊に帰らずに、ここで戦闘部隊を編成する。直ちに兵舎に戻り、身辺整理をし、出動準備にとりかかり、次の命令を待つように」と命ぜられました。

翌日の10日、教育隊は小松連隊(学校長、

小松大佐が連隊長), 荒木連隊 (教育主任, 荒木少佐が連隊長) に分けられました。

小松連隊は教育隊の第2中隊と第4中隊と第5中隊 (機関銃隊), 第6中隊 (歩兵砲隊) の半数。荒木連隊は教育隊の第1中隊と第3中隊と第5中隊 (機関銃隊), 第6中隊 (歩兵砲隊) の半数に, 戦闘部隊が編成されました。ここに軍曹の階級を付けた小隊長, 分隊長, 兵が生まれました。

私は, 小松連隊第1大隊第2中隊第1小隊に所属しました。荒木連隊は, 10日の真夜中に牡丹江方面に向かって出動しました。慌ただしく駆け足で出動しました。軍靴の音の響きに目が覚め, 心から武運長久を祈りました。

8月11日は身辺整理や隊内の整理に従事しました。そうした時, ラジオ放送で広島に特殊爆弾が落ち, 甚大な被害があったこと, 福山も空襲を受け市の中心部が3分の2焼失したことを知りました。

遺書を書くようにとの下達 (かたつ) があり, 認 (したた) め提出しました。午後8時頃出動命令が下り, 雨の中, 牡丹江と反対の東京城 (トンキンジョウ) に向け出動しました。任務はその飛行場付近に降下が予想される敵空挺部隊を迎撃することでした。暗闇の中を重い背囊 (はいのう) が肩に食い込むのを堪えながら, 黙々と早足で進みました。

8月12日朝, 一文字山隘路口に到着する。ここの地形は丘と丘に挟まれた一本道です。連隊命令で「部隊はここで敵戦車を迎え撃つことになった。直ちに道路を挟んで展開し, 蛸つぼを掘って戦闘準備に入れ」とのことで蛸つぼを掘る。土質が固く苦勞する。

決死の覚悟をしました。

翌朝, 敵戦車がこちらへ来る気配がなくなったので, 東京城に向け出発する。8月13日, 東京城に到着。飛行場は格納庫など, 友軍によって爆破炎上していました。ここで大休止する。夜になって, 敵戦車が接近したので迎撃するよう命令が下り, 再び隘路口に向け, 雨の中強行軍で引き返しました。途中, 避難する開拓団の一团とすれ違う。前線に向かう我々に, 「兵隊さん頼みますよ, 頑張ってください。」と連呼しながら去って行きました。「任してください」と我々も力強く答えました。一团はほとんど女, 子どもであった。戦争の哀れさ, 弱い立場の人が気の毒でした。

8月14日, 隘路口に戻り, 迎撃の配置につき, 敵戦車の侵攻を待ちました。この日も敵戦車の接近はなく, 昼前, 移動命令が下り, 敦化 (トンカ) の師団の指揮下に入ることになり, 出発しました。隘路口を出た時, 突如ソ連戦闘機5機の空襲を受け, 第6中隊長の戦死をはじめ, 候補生12名が負傷しました。

15日, 東京城で大休止。夕刻, 沙蘭鎮 (サランチン) に向け行軍。この夜も雨でした。

16日, 朝, 沙蘭鎮 (サランチン) という部落で大休止。夕刻, 爾站 (アルシャン) に向け出発。常に空襲を警戒し, 夜の行軍でした。そのため, 疲労が重なり, 落伍者が多数出ました。隊列も乱れました。「眠りながら歩く」という話を聞いていましたが, 初めて体験しました。沙蘭鎮で後衛のため1個小隊が残ったが, この小隊はソ連軍と戦闘し, 戦死者20数名が出たと, 後で聞きました。

8月17日昼前、爾站（アルシャン）が近くなった頃、満軍の少数の兵を引率していた将校が馬上から、「停戦になったよ」と教えてくれました。これで石頭（セキトウ）の教育隊に帰れると一様に喜びました。ソ連との停戦だと思いました。この将校が、温厚な風貌で、建国大学の教官とのことだったからか、疑いませんでした。

爾站（アルシャン）に着き、昼食を終えた頃、ソ連のジープが来ました。それには白旗を掲げた軍使が乗っていたので、本当に停戦になったと思いました。ジープは敦化の方へ走り去りました。

このときには、連隊長等の上級幹部は情報収集で、「玉音放送」があり、全面降伏したことは、通信手段で知っておられたと思うが、血気盛んな我々に、敗戦を今知らせる戦闘を起こしてはとの危惧があつて、知らせなかったと思います。

8月18日、爾站を出発し、昼の行軍となった。塔拉站（タラシャン）、官地（カンチ）で大休止し、8月20日、東沙河沿に着く。夕方、終戦の詔勅（玉音放送）の伝達がありました。ここで、教育隊の将校と別れ、第1大隊長に穂山准尉が、第2大隊長に大西曹長が着かれました。

8月21日、自らの手で武装解除し、22日、敦化に向け、軍装なしの姿で行進しました。敦化の市街地に入ると、満人家屋には青天白日の旗が掲げてあり、赤旗も見えました。満人が冷ややかな目で横から見ていました。誰かが、「幹部候補生、歩調とれ」の号令をかけました。1,300人程の軍曹の襟章を付けた候補生が、一斉に歩調をとって堂々の行進をしました。それが意地を見せた最後

のささやかな抵抗でした。

○敦化集結所から愛河（アイカ）集結所へ

敦化の市街地を抜け、郊外の野原に集結しました。そこには、我々軍人のほかに、民間人、開拓団の人々もたくさん集結しており、大集団でした。大集団の中に、陸軍病院におられた看護婦さんが、頭を丸坊主にし、男装した方が何十人かおられました。話によれば、恥辱を受けて自殺された方、また、恥辱を受ける前に集団自決された方もおられたという悲劇の話でした。開拓団の中にも同じような悲劇があったようでした。戦争の残酷、悲惨が身に沁みました。

ここでの使役は、日満パルプ工場の機械など、略奪物を貨車に積み込む作業でした。

9月初め、師団長の富永中将が訓示されたのを覚えています。「戦争に敗れたけれど、諸君はこれから日本へ帰れるから、それまで身体に気をつけて軍人らしい行動をとり、無事に復員してほしい」という訓示でした。これで近いうちに日本に帰れるという希望を持ちました。（それが嘘になったんです）

そこで、朝鮮出身の兵士は、ここから故郷へ帰ってよいということでした。候補生の中からも、何人かは北鮮に向け帰って行きました。また、在満中の召集兵や地理のわかった兵の中には、民間人の集団に紛れ込んだ者もいたかも知れません。

9月5日、牡丹江から引揚げ列車が出るということで敦化を出発しました。ソ連兵の監視の下での行進です。敗戦の悲哀を強く感じました。なぜか、東沙河沿付近で、彼方やら此方やらを露営しながらゆっくりと進みました。9月12日、西沙河沿に到着。

ここで逗留することになり、河畔の広い草原の台地に携帯天幕を張り合わせて屋根にし、小隊単位の幕舎を設営しました。

ここで、1,000人単位の作業大隊に編制替えがあり、私は254作業大隊第1中隊に編入しました。大隊長、第1中隊長も、新しく他の部隊から、兵科でなく技術科の奈良中尉、千葉少尉が来られました。これから復員するのに変だなと思いました。

ここでの使役は、主に糧秣受領、薪取り、ソ連の略奪物を貨車に積み込む作業でした。

西沙河沿に来て数日後、荒木連隊の候補生が、破れた軍服姿で疲れ果て、数名が辿り着きました。彼らの話により、同期生が磨刀石（マトウセキ）で、押し寄せてくる戦車に爆薬を抱いて飛び込み、勇敢に戦い、戦果をあげ、多数の戦死者が出たことを知りました。

10月23日、幕舎を撤去し、牡丹江に向け出発しました。風光明媚で知られる「鏡泊湖（キョウハクコ）」の辺りを通りました。紅葉が湖に映えて美しかった。東京城、石頭、寧安と露営し、敦化から200kmの地、牡丹江に近い「愛河（アイカ）」というところに着きました。10月30日でした。ここが引揚者の集結地であると知らされたのです。

丘の上にある兵舎跡に収容されました。屋根は随所が破壊されていました。そこは、荒木連隊の猪俣大隊が陣地を構築した磨刀石が右下に、本部を和沢大隊が陣地を構築した掖化（エッカ）が左に見える、その中央に位置するところでした。磨刀石は、同期生が敵の戦車に肉迫攻撃を敢行し、猪俣大隊長以下500人以上が戦死したところで

した。何か霊魂が我々を「愛河」に呼び寄せたような因縁を感じました。（「岸壁の母」という有名な歌があります。そのモデルとなった岸壁の母、端野いせさんのご子息、端野新二候補生は、肉迫攻撃隊の一員でした。）

戦友が、近くの戦場跡へ使役に行ったとき、白骨の死骸が10数体放置されていたので、懇ろに埋葬したと言っていました。襟章で候補生と分かったそうです。

○満州からシベリアへ

11月10日だったか、いよいよ復員することになり、引揚列車に乗り込みました。有蓋貨車に40人詰め込まれるんです。窮屈この上なし。中央には、ドラム缶を改造したストーブと薪、前後に二段式の寝床、扉の下部に一か所、便所用に管が外に向けて出してありました。小窓が上部に一つあり、僅かに光が差し込んでいました。外から鍵がかけられました。

富永中将の「日本に帰れる」の訓示を信じた気持と不安が交錯しました。出発したのは、4、5日後でした。亡き戦友の御霊に合掌し、心安かれとお祈りしました。そして、満州での激動の一年を回想しながら、満州に別れを告げたのです。

ソ満国境の町、綏芬河（スイフンガ）を通過し、ソ連領に入る。列車は、南下しているのか、北上しているのか、夜でよくわからなかったが、夜明けとともに、北上しているのがわかりました。ハバロフスク駅の引き込み線あたりで10分ほどの下車を許され、水の補給などをして、再び乗車。アムール河（日本名・黒竜江）を渡る。帰

国の夢は完全に破れました。シベリアに行くんだとわかりました。

コムソモリスクから支線に入り、ドーフというところで降ろされました。それから1 km位歩いて、講堂のような施設に入りました。途中、先に着いて作業している日本人が手を振ってくれました。

○関東軍は、何人ぐらいですか。

ソ連に抑留されたのは、60万人くらいかな。

○シベリア抑留時代は

ドーフの講堂らしき施設で屯（たむろ）して寝ているところを起こされ、トラックの荷台に乗せられて奥地に向け出発した。厳しい寒さに体の芯まで凍えるようでした。途中、急にトラックが止まる。すると暗闇の中、何者かが両側から乗り込んできて、万年筆や腕時計を略奪するんです。警備兵、運転手は黙認です。

11月20日朝、古ぼけた収容所に着きました。そこは、「202」収容所といいました。奈良大隊の1,000人が収容されました。

私たちの作業は、3 kmほど離れた製材所の近くの森で伐採し、製材所の集積場に運ぶことでした。伐採は、倒す方向を決め、斧で切り込みを入れ、2人用の大きな鋸で両方から押し合って切るんです。初めての経験でした。毎朝5時頃には門の出口に四列縦隊に整列し、員数点検を受けるのですが、ソ連の警備兵は掛け算を知りません。計算が苦手です。1時間もかかることがありました。この間、凍傷にかからぬよう常に体を動かしていなければなりませんし

た。やっと出発。凍った道を滑り滑り、転ばぬよう歩くのに苦労しました。帰りは、収容所の宿舎補修用の板を担いで暗くなった道を帰らされました。疲労困憊の毎日でした。食事は、薄い1枚の黒パンと飯ごう3分の1程度の実の少ないスープでした。

虱（シラミ）の攻撃にもみんな困りました。寒さと栄養失調、体力消耗で亡くなる者が次々と出ました。便所から帰ってみると冷たくなっていた戦友もいました。

残念なことに、隊内で盗難があら、こちらで起きるようになり、生活が荒んできました。12月31日、突然移動命令が出ました。奈良大隊は分散されて、私は大隊長の奈良中尉とはここで別れ、奥地の「204」収容所に移動しました。200名ぐらいだったと思います。

この収容所は、「202」収容所に比べ、敷地も広く、宿舎も整っていました。昭和21年元旦、広場に全員集合し、大隊長のあいさつがあり、その後、ソ連の警備兵の員数点検があり、いつものごとく何回も計算のやり直しで、時間を要しました。宿舎に帰ると、留守中に所持品の検査をしたらしく、大事にここまで隠し持ってきた腕時計、万年筆と寄せ書きの日の丸の旗がなくなっていました。略奪されたようです。残念ながら、諦めなければならない身でありました。

磨刀石で戦った候補生隊の団結を恐れてか、さらに100名に分割され、昭和21年2月、ゴーリン「203」収容所に移動しました。

シベリア生活の中で、一番記憶に残っている収容所がゴーリン収容所です。入所早々、広場に集められ、南主計中尉から「貴様らは幹部候補生でありながら、気力も若

さも失っている。これからの苦難を乗り切って祖国に無事帰ることができるか」と檄が飛びました。それで気分的にしゃきっとしました。確かに、気力も体力もこの時が一番弱っておりました。

ここでの作業は伐採作業でした。ここで一番困ったのは、夜中に便所に行くようになったことでした。外套をひっかけて上段の寝床から降り、二重扉を開けて出るまで約10メートル、寒い中をそれから約50メートル程走るんです。便所に着くまでもたないことも度々、やむなく放尿しながら走り、帰りに雪の上に着いた跡形を雪で消して帰るんです。

この頃、微熱が出ましたが、38℃以上でないと休みになりませんでした。3月中旬だったか、身体検査がありました。検査といっても、ソ連の女医さんがお尻の肉をつまんで、弾力性があるかないかで、「1級、2級、3級、オ・カ（虚弱者）」の等級を決めるんです。「1級、2級」は重労働、「3級」は軽作業、「オ・カ」は休養です。私は3級に格下げになりました。ただちに「3級」の小隊の宿舎に移動し、「米搗（つき）小屋」で米搗き作業をすることになりました。米搗きは、一方の壁際に臼が5つ横並びにあり、杵の柄は3メートル位の長さで、シーソー式の「足踏み米搗き機」で、反対の壁際の台上に5人並んで「ドスン、ドスン」と搗くんです。これは日本人が作ったとのことでした。歌を歌ったり、話をしたりで搗くので楽しかった。また、室内の作業であり、寒くなくてよかった。米搗きといっても、ほとんどが高粱（こうりゃん）で、お米はソ連用が多かった。

1カ月ほどして、元の小隊に戻り、伐採作業に出ました。初夏になると、「シベリアねぎ」と呼んだが、「ねぎ」に似た10センチメートルくらいの草が芽生えて、それを食べたり、白樺の木肌に斜めに切り込みを入れて缶をつるしておく、樹液が取れ、それを飲んだりして栄養補給をしました。また、炊事係の考案で、ビタミン不足を補うために、蝦夷松や樅の木の葉を煎じ、その汁を飲んだりしました。苦かったが、薬と思って飲みました。

この収容所には、浴場があり、はじめて入浴しました。湯船に入るのではなく、湯桶に少し湯をもらって、洗うんです。虱（シラミ）の駆除のため、毛は全部剃る。入浴を終えて浴場を出ると、隣の滅菌室で衣服を滅菌してくれていました。おかげで虱はいなくなりました。

虱がいなくなると、今度は南京虫の夜襲に困りました。壁や床の木材の隙間にいるらしかった。南京虫退治に木片に穴を作り、枕元に置き、朝起きてみると10匹ぐらいい入っていましたが、それでは追いつかず困っていたところ、衛生係が南京虫は灯油に弱いことを知り、寝具を外に出し、部屋を密封し、照明用の灯油を使って退治してくれました。歯が痛くなったときがありました。医務室に行くと、「我慢しろ」と言って、戸倉軍医にペンチで歯を抜かれました。痛み止めの薬もまったくありませんでした。

この収容所は、軍隊組織が残っており、規律が厳正で、盗難もなく、安心できたし、夕食後は和やかに故郷の話をしたり、歌を歌ったりして時を過ごしました。浪曲を唸る者や、落語をする者もおりました。俘虜

用郵便葉書を父に宛て出したのも、このゴーリン収容所でした。

10月頃、民主運動が始まりました。日本新聞が発行され、収容所に数部届き、回覧されました。日本人がハバロフスクで作っているんです。内容は、日本は焦土と化して、住む家も食料もないとか、総理大臣も何人も代わって政治不安とか、今、日本に帰っても幸福になれないなど、その一方では、ソ連の共産主義を賛美した記事でした。同じ頃、オルグが2人派遣されてきました。

「コムソモリスク」から来たと聞きました。所内で啓蒙活動をするようになりました。そうした頃、食堂で演芸会がありました。所内に、芸能界にいた人や歌手もおり、上手でした。娯楽に飢えていたので、楽しいひと時でした。その後、オルグの話があり、人集めの手段の一つであったのかと思いました。オルグの主導で集会がもたれ、階級章を襟から取ることが決まりました。

11月の移動命令で、次の収容所に移ることになりました。ゴーリン収容所の大隊長、笠井大尉は若い誠実な方で、常に温かく接していただいたし、南主計中尉は、毅然として厳しい反面、気配りのある方でした。また、同期生もよくしてくれたし、医務室の戸倉軍医にもお世話になりました。お陰で、苦しい時を乗り切ることができた思い出の多い収容所でした。

このたびの移動は、20人くらいの小グループで、候補生は私一人だったと思います。「8」分所といったかな、小さな収容所で、陰気な感じがしました。作業は伐採と宿舎の修理だったと思います。この収容所の思い出といえば、「ドーフ小曲」という歌が伝

わってきて、私の愛唱歌になったことです。

年が明けて、昭和22年2月、移動命令により、少人数で「6」分所に移動しました。ここは、入ソしたときの「202」収容所から通った製材所です。懐かしく思いました。帯鋸で台車があり、以前より整備され活気がありました。最初、ここでは、丸太の上に積もった雪を除く雪掻きや、丸太を搬入する作業をしました。4月頃だったか、監督の当番の使役に出ました。主として、部屋の掃除、留守番、雑用でした。ただ、監督の宿舎が川辺にあり、雪解け時期で、度々床上浸水をし、掃除に苦労しました。監督は、35歳くらいの男性の技師で、独身の温厚な人でした。

この収容所も、階級章は取り外して、中央委員とか、中央委員候補とかが、運営に携わるようになっていました。私は、知らぬ間に、中央委員候補になっていました。民主運動は、オルグの要請で、「民主音頭」「赤旗の歌」「インタナショナルの歌」を、朝の作業前や昼休みに歌わされました。

○いつ日本に戻られましたか。

昭和22年7月2日、突然、帰国命令があり、それを監督が知らせてくれたので、急いで宿舎に帰り、荷物を取りまとめました。待つ間もなく、他の収容所の帰国者を乗せたトラックが来ました。それに飛び乗って集結所に向かいました。6分所からは最初の帰国者です。5名選ばれ、3名が病弱者で、2名が「ハラショーラポーター（よく仕事をし、の意）」とのことでした。私は、その2名の中に選ばれていました。

○ソ連が選ぶんですね。

誰が選ぶ権限を持っているのか、わかりません。監督の当番の使役をしていたので、監督が選んでくれたのかと思っています。

途中、1～2か所の収容所に寄り、帰国者を乗せて「ドーフ」の近くの集結所に着きました。収容所らしい構えではなく、湿気た暗い感じの家屋で、混雑していました。ここでは、線路の路盤の補修工事をしました。集結所で帰国の編成がおこなわれ、私は、小宮候補生を長とする、候補生60人の隊に編入しました。別々の収容所から来た者ばかりで、知った者はいませんでした。帰国列車に乗ったのは、7月28日だったでしょうか。

「ナホトカ」の手前の駅でない所で、列車が止まりました。何事かと思っていると、原っぱに降ろされて、60人は逆戻り。近くにソ連の部隊があり、その部隊の近くに移動し、テント生活をしました。小宮候補生は柔道6段の猛者であったので、ソ連の警備兵も遠慮してか、監視も緩く、自主的に行動ができました。ここでは、ソ連部隊の越冬準備の糧秣、燃料の薪、野菜の確保などの作業や地下倉庫での漬物づくりでした。

11月20日だったか、やっと帰国することになり、ナホトカに向け出発。ナホトカに着くと、海岸近くに、第1収容所、第2収容所、第3収容所が並んでいました。帰国者で混雑していました。まず、第1収容所に入り、所持品の検査。合格すると、第2収容所へ。ここでは、オルグが帰国の条件として、日本に帰って民主活動をする事、「スターリン閣下」に対する感謝文に署名することなどを要求しました。合格する

と、第3収容所へと移動するんです。帰国を許可されたのは、11月28日のことでした。

岸壁に日本船の「大安丸」と書かれた大きな古い貨物船が繋いでありました。この船が、昭和22年の最終の復員船とのことでした。

一人一人、名前を呼ばれて乗船です。待つこと久し、無事名前を呼ばれ乗船です。タラップを一段一段踏みしめて上りました。船室は、船底の貨物置場が充てられており、窓はないし、照明も悪く、陰気でしたが、帰国の喜びに浸っている私は気になりませんでした。夕方、出航しました。甲板に上り、甲板から暫く灰色に覆われたナホトカの町を眺めると、満州、シベリアでの過ぎ越し方の出来事の数々が脳裏に浮かび、万感胸に迫り、涙が出ました。

二日目の夜半から、暴風雨に遭い、船の壁に水が浸みてくるし、船は上下左右にひどく揺れて、一時は沈没の不安を感じました。貨物船なので、便所は甲板の方にありました。嵐の中、用足しには困りました。こうようにして階段の上まで辿り着き、扉をあけると波しぶきが全身を叩きつけました。波が甲板を洗い流していました。船酔いがひどく、食事は全く受け付けませんでした。ほとんどの人が、船酔いしました。幸い、一昼夜で収まりましたが、船酔いで寝込んでしまいました。

12月1日朝、「函館山が見えるぞー」「日本に帰ったぞー」と叫ぶ声に、衰弱した身体に気力が蘇り、甲板に急いで上りました。あれが函館山だと教えてくれました。船は、青空の下、静かに函館港へと進んでいまし

た。「国破れて山河あり」、清々しい空気を全身に吸い込みました。眼下に一艘の小舟から、日の丸の旗を大きく振り、私たちを迎えてくれています。そのときの感動は、終生忘れることはありません。

下船前に、進駐軍の係員からシベリアのことについて尋問がありました。それから検疫などがあり、12月2日、下船し、日本の土を踏みました。宿舎から、5分ほど歩いて風呂屋へ行き、入浴しました。湯船で手足を伸ばすのは2年半近くにもなりませんか、シベリアの垢を洗い流しました。復員手続きを終えて、12月5日朝、青函連絡船に乗って、青森から汽車で東京へ。列車は、満員で身動きできず、仙台駅で窓から降りて、トイレに行った記憶があります。東京で一泊しました。ガード下に、浮浪児が屯（たむろ）しており、かわいそうでした。翌朝、汽車に乗り、福山駅に着いたのは、その翌7日の早朝でした。

○日本に帰った時の福山は

出征した時と、駅前は一変していました。駅を出たら、草戸の山並みが見えました。駅前に家は建っておっても、平屋のバラックでした。空襲で大半焼失したことは、ラジオ放送を聞いて知っていたので、驚きはありませんでした。とにかく静かな朝でした。帰り道に、ただ一つ、市の公会堂が昔の姿で残っており、懐かしかった。我が家のこと、父母の安否を気にしながらも、気を落ち着かすよう、故郷の土を一步一步、踏みしめながら歩きました。誰にも会いませんでした。元の地に、平屋の新しい家が建ててありました。表札で確認すると、我

が家でした。父母も健在でした。

《終わりの言葉》

在留邦人、特に女子、子どもが一番気の毒でした。関東軍がもっと早く避難させていたら、被害が少なかったのではないかと思います。

ソ連の侵攻に際し、最前線に出動した石頭予備士官学校の同期生数百名は、怒涛のごとく押し寄せる敵戦車の前に敢然と爆薬を抱いて身を投じ、散華（さんげ）した。私の属する隊は、全面衝突寸前、停戦の下命があり、私は、運あって生を得た。

それから2年数か月の間、屈辱と苦難のシベリア抑留生活を送った。戦争の残酷無情と、極限における人間の持つ善行と悪行の両面を目の当たりにし、多くのことを学んだ。そして人権侵害の最多のものは、戦争であると肝に銘じている。

ソ連の侵攻により満州で、あるいはソ連のシベリア抑留により亡くなられた人々の御霊に合掌し、心からご冥福をお祈り申しあげます。

ドーフ小曲

昭和 21 年 11 月頃，どこからとなく伝わってきた唄で，故郷を偲んで唄った

- 1 流れ遙かなアムールの
河波越えて来たものを
鳴いてくれるな寒古鳥
鳴けば夕日も淋しかろ
- 2 シベリア嵐すさぶ夜も
明けりゃ果てない銀世界
唄う声さえカチューシャの
ロシア娘が櫓でくる
- 3 百合の花咲く密林で
仰ぐ空さえ青葉越し
なんの白樺松丸太
男度胸の山ぐらし
- 4 元気でいこうよ戦友よ
いばらの道を踏み越えて
明日は故郷の山川に
明るい朝が待っている

※ 「ドーフ」：地名

民主音頭

昭和 22 年に入り，民主運動が起こり，闘争歌として唄わされた

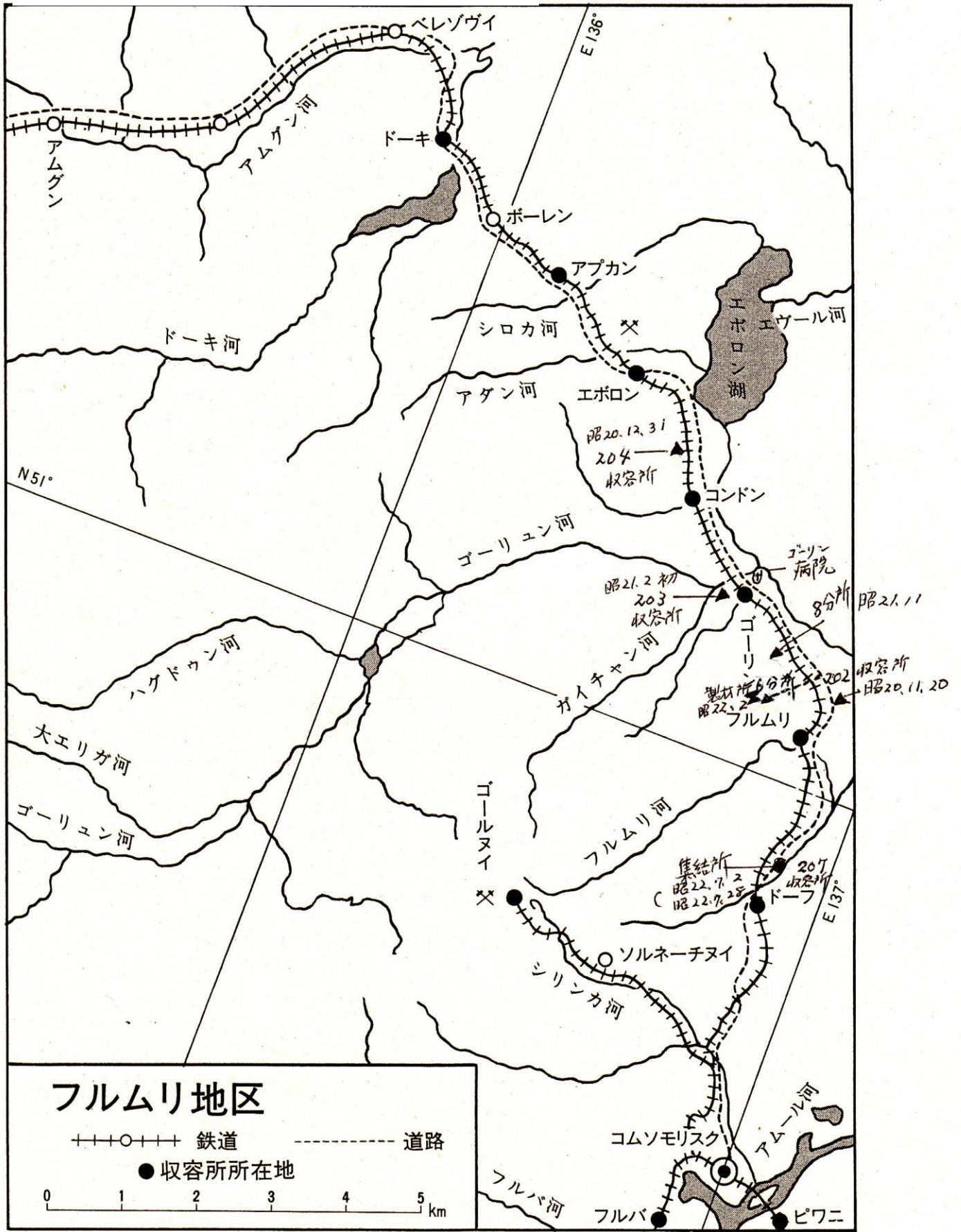
- 1 朝だ夜明けだ黎明だ
軍国廃墟のその上にその上に
民主日本は高らかに
仰ぐ大空雲一つ
- 2 寒いねぐらと言うな友
吹雪むちうつ密林で密林で
試す俺等の身と心
国を偲んで月を見る
- 3 芽吹く木の香や風かほる
起こす土さえ歓びに歓びに
溢る歓喜のタポールを
振ればこだます原始林
- 4 行くぞ荒波乗り越えて
シベリア鍛えのこの腕でこの腕で
明日の前途の戦に
民主日本の建設だ

※ 「タポール」：斧

◇ 旧満州・旧ソビエト連邦地図



◇ フルムリ地区收容所所在地



フルムリ地区

++++○+++ 鉄道 - - - - - 道路

● 收容所所在地

0 1 2 3 4 5 km

9 被爆体験伝承の集い

◇総合司会

おはようございます。これから被爆70周年記念事業、福山市原爆被害者友の会による「被爆体験伝承の集い」を始めたいと思います。開会のあいさつを藤井会長にお願いします。

◇藤井 悟 会長

みなさんおはようございます。

ご承知のように、今年の3月31日に前の会が解散いたしました。その後、私ども二世の者が中心になって、この会を継続するというので、4月4日から活動しております。

被爆者の高齢化によって、全国各地の被爆者の会が、解散もしくは休止といった状況に追い込まれております。しかし、原爆被害者の団体というのは、平和を求め、戦争をしない、そのスローガンのためにあるわけであります。これから先、10年経とうが20年経とうが、世界で唯一の被爆国である日本では、こういった活動は非常に大切なものだと思っております。この思いをぜひとも二世、三世、そして一般市民の方々にも引き継いでもらいたいという意図で、今回こういう集いをさせていただきました。

実は、今朝の中国新聞を見ていましたら、「祖母を苦しめた戦争」という題名で、33歳の方が投稿されておりました。ちょっと読ませていただきます。「私が小学生のころ、戦争体験を聞いてくるという宿題がありました。祖母にお願いすると、断られてしまいました。しかし、嫌がる祖母に無理矢理一度だけ話してもらいました。1945年7月1日の呉空襲のとき、祖母は川へ飛び込み命からがら逃げました。そして、原爆投下の5日後、親戚を探して焼け野原の広島を

歩き、被爆してしまいました。生首の遺体、跡形もない家や建物の瓦礫、言葉に詰まりながら話す祖母の姿を見て、戦争のむごさは想像以上にひどいものだと、子ども心に感じました。7年前その祖母は、多発性骨髄腫で倒れました。被爆者手帳も持たず、優遇措置があるのにどうして手続きをしないのかと尋ねました。あの惨劇を思い出したくないから、話さずにお金を払って治療したほうが良いと答えた祖母の言葉が、今も胸に深く突き刺さっています。祖母は、貝のように口を閉ざし、病魔と必死に闘って他界しました。何もできなかったことを、とても歯がゆく思いました。」このように、お孫さんに当たる方が、祖母の被爆体験を回想しておられました。一言で被爆体験の伝承というふうに言いますが、被爆者当事者にとってみれば思い出したくないことでも、語っていただかないと、我々後を継ぐ二世・三世には、被爆の実相というものをなかなか引き継ぐことになりません。そういった状況の中で、苦しい思いをされながらも、こういうことは二度と起こしてはならないという思いから、振り絞って体験活動を支えていただく機会が今日であります。そういう意味では、ぜひ若い方々に被爆者の方の思い、あるいは願いというものを、汲み取っていただいて、この福山で被爆体験を正しく引き継いでいただきたい。そして平和な社会をつくっていくための担い手になっていただきたい。ということ、私どもの会は切望しております。このことが平和への一歩になると、私ども主催者として期待しております。また、発表していただくみなさん方、ご苦勞をおかけしますが、どうぞよろしく願いいたします。

◇総合司会

これから体験発表を3名の方にしていた

できます。ここからは、ピースメイトの船井さんに司会を代わっていただきます。

◇船井 真奈美（ピース・メイト）

みなさんおはようございます。ただ今紹介していただきましたが、私は、ピースメイトとして被爆体験継承の活動をしています。

(中略)

それでは、二人目の方をご紹介します。松永町にお住まいの池尻博様、大正14年4月生まれ、被爆当時は20歳の年齢でした。広島市二葉の里を少し入った所で、軍馬の餌にする草取り作業中に被爆なさいました。本日のテーマは、「大自然に反逆する原爆はいらない」でお話いただきます。

◇池尻 博さん

ただいまご紹介いただきました、池尻博です。私は大正14年、1925年の生まれでありまして、今年で90歳になりました。これだけ生きられたことについては、感謝したいと思っていますけれども、最初に、幼少のころから世の中がどのように変わってきたかということをお話したいと思います。

私が小学校1年生の時に、満州事変が起きました。霞小学校だったんですが、それから6年生の時に日中戦争、今の中華人民共和国との戦争が起きました。私ども6年生ですから小学校でいちばん年長ということで、今の農協会館の辺に、歩兵第41連隊の正門があって、そこから日中戦争に出ていく兵隊さんを、駅まで道すがら何回も見送った経験がございます。これから15年戦争ということでございますので、その当時送って行った兵隊さんが何人無事に帰ってこられるのだろうか、そういうことを

考えるわけでございます。

それから、昭和18年9月、呉の海軍工廠へ徴用で行きまして、ちょうどそのころ、戦艦「大和」がおったわけですが、その戦艦「大和」の飛行機を撃ち落とす高角砲に詰める砲弾を作っておりました。そのようなことで、私ども幼少のころから兵隊に行くまで、戦争が止まったことがありません。そのころは徴兵検査というのがありまして、二十歳で徴兵検査を受けて、みんな兵隊に行っていたんです。長引く戦争で兵隊が足りなくなって、私は19歳の時、徴兵検査を受けました。甲種合格というのは立派な体格の人なんです。私はこのようにスラッとしているので、第二乙ということで、昭和20年1月10日に、広島城の西側の野砲兵第五連隊補充隊へ入隊しました。

8月5日、日曜日でありましたが、夜食の時、「明日は、おまえは馬の草を刈る作業に出ていけ」と言われました。8月6日の朝、4時半に起きまして、草を刈りに広島市の二葉山に向けて出発しました。少し刈って一休みしようかなあと考えていた時に、ピカッと辺り全体が光りました。と同時に爆風がやってきて、無意識のうちに腹ばいになりました。中心地から3キロメートルぐらい離れた所だったので、火傷もなく別に何もなかったのですが、これはおかしいぞ何かあったのでは、普通の爆弾と違うぞということで、一応原隊に帰ろうということになりました。山を下って行ったんですが、その山道で被爆された大勢の市民の方が、顔を灰だらけにして人間とは思えないような形相で、逃げてくるのに行きちがいました。山を降りた所に東練兵場がありました。今の駅の北側です。そこは大勢の市民の方が助けを求めて来ていました。中でも見ていられなかったのは、若い娘さ

んがパンツ一枚で立っていて、手の先から焼けただれた皮膚が、水がしたたり落ちるように垂れ下がっていて、「助けて」と、こんな光景に出会いました。私達は一応原隊に帰るようにとの指示だったのですが、広島を中心地は燃え盛っていましたので、帰ることができません。そこで、東練兵場や、饒津（にぎつ）神社の辺りに大勢の被爆者の方がおられたので、そういう人たちの介護にあたりました。それから原隊へ帰ったのですが、門の前にも、当日入隊があったのか、見送りの多勢の市民の方が、倒れておられました。原隊の兵舎は焼けてしまって跡かたもありませんでした。軍隊の中にも防空壕を掘っていたので、生存者がいるのではないかと探して歩きました。兵営の空いた所へ生き残った人を集めて介護しましたが、その中の一人で、頭が割れて脳みそがしたたり落ちた方がいましたが、それでもまだ生きていて、「水がほしい、水がほしい」と言われていました。水をあげたらそこでこと切れるので、水はあげないことになっていました。声が止んだかなと思っていたら、その時点で命が切れていました。

一夜明けて、担架を作って、生き残った方々を馬を疎開していた三篠の方へ疎開させるために運びました。そこには衛生隊も疎開していましたので、よろしく願いますということで、我々はまた原隊へ帰りました。そこで、亡くなった人をなんとかしなければと、兵舎から逃げられず黒焦げになった人（軍靴は革が分厚く、靴だけ焼け残った遺体）を一ヶ所に集めて火葬にしました。100体ぐらいあったでしょうか。足腰の丈夫な人は原隊を離れて疎開した人もいました。火葬が終わった後で、郊外へ逃れた人を探そうということで出かけましたが、白骨になっていた方もおられました。

その時は、「原爆」というのは分からな

ったのですが、ものすごい爆弾があるものだと思っておりました。そのうち呉の海軍の方から軍医さんが来られて身体検査をしていただきました、その時、毒素が溜まっているので広島市外か郊外へ疎開した方がいいのではと言われたそうですが、私の部隊は、そういうことはしないで城の方へ移転して、後始末をやったわけです。遺骨を並べたり、亡くなった方の家族への対応をしたりしていました。他の兵隊で田舎へ帰ることができる人は除隊したのですが、田舎が広島の方であった私どもは、台風が来たために山陽本線が動かなくなったので、いつ帰られるか分からないなあと思っていました。9月25日の朝になって、広島県の東の方や岡山県の方は、すぐ帰ってもいいぞということがあって、25日の夕方、宇品から船に乗って帰りました。呉の沖には米軍の機雷がたくさん落ちていました。船に乗る前に、機雷にあたっただけでいつ爆発するか分からないぞと、聞かされていたのですが、それでも帰ろうということで乗りました。後から聞いたのですが、船は喫水が浅く、深い方にある機雷を避けたので、触れることなく無事帰ることができました。

今から考えますと、8月5日から9月25日まで、放射能がいっぱいあった所へ居たということなんです。さっきも話したように、8月5日に「明日は早く起きて、二葉山に草刈りに行きなさい」と言われていなかったら、真っ黒焦げになって死んでいたわけです。中隊の同じ班と一緒に演習などやっていた人は馬場の所で亡くなったのですから。私は、草刈りに行ったために生き残ったわけです。このことが、今でも頭から離れません。そういう負い目を持って生きてきたのです。原爆で亡くなられた方はたくさんおられるわけですが、私がそういう思いで生きてきたことを、みなさんにお

伝えたいのです。私はこれまでどうこう
いうことはなかったのですが、5年前に大
腸癌になり、今は治癒しておりますが、放
射能（放射線）の影響でなったという国の
認定を受けたのです。当時は、どれだけ放
射線を受けたかというのは分かりませんで
した。

今も東北の原発の放射線が出ているので
すが、今は放射線がどれだけ出ているのか
分かります。だから、世の中から核兵器を
なくしていかなければなりません。戦争が
あるということは、行きつくところは原子
爆弾を落とすということになるわけです。
広島と長崎に原爆が落とされる前、中国や
アメリカと戦争をし、8月15日に終戦にな
ったのですが、この間の日本人の戦没者数
は310万人です。その中で、軍人・軍属が
230万人、外地に行っていた一般の人たち
も30万人亡くなっている。内地でいろんな
戦災にあって（福山も空襲がありました）
50万人が亡くなっている。合計で310万人
が亡くなっています。そして、原爆被害者
は、広島で14万人、長崎で7万人、これは
即死の状態であります。相手国では、軍・
一般含めて3000万人の人が亡くなってい
る。戦争のためにこのような被害があった
わけです。

私は70年たって、生かしていただいて、
こうしてみなさんにお話しできるというこ
とは、戦争をしないという平和憲法を作っ
ていただいて、今日まで戦争をしないでき
たし、私も生かしていただいたと思ってい
ます。ですから、原爆を落とすというのは、
その前に戦争があるんです。だから戦争だ
けは、絶対にしないほうがいい。戦争は、
相手を殺さなければ自分が殺されるんです。
それが戦争なんです。昔と違って今は、後
方支援だから戦争ではないと言っていますが、
後方であろうがなんであろうが、戦争

に違いないんです。その証拠に飛行機・ミ
サイル等があります。これらが飛んできたら
防げないですよ。だから、戦争があつて
はならない。そして、原子爆弾（核）はこ
の世の中からなくさなければならない。自
分は運よく生き残りましたが、前話したよ
うに戦友への負い目があったから、これま
で話すことができませんでした。自分が被
爆したから、今でも子どもや孫が癌になる
のではと心配しております。

今後、戦争が起こらないように、みんな
で頑張っていきましょう。ありがとうございました。

◇船井さん

池尻さん、どうもありがとうございました。
それでは、最後の方を紹介させていただ
きます。松永町在住の清代律子さんでござ
います。昭和2年11月のお生まれです。被
爆当時18歳の年齢でした。広島市千田町山
中高等女学校で、授業中に被爆なさいまし
た。今日は、「青春を奪われた」というテー
マでお話しいたします。

◇清代 律子さん

今日は、ありがとうございます。絵は上
手ではないのですが、絵を見ていただきな
がら、私の話を聞いていただきたいと思います。

日本の国とアメリカの国とが戦争をし、
大激戦となり、世界で初めての原子爆弾が
広島に落とされ、恐ろしい想像もできない
被害がありました。地面からわき上がった
熱を含んだちりやほこり、放射能が黒い雨
などで再び下に落ちて、大きな害を与えま
した。この光景が目には焼き付いて記憶にあ
る方が、大勢おられると思っております。

（これは当時の広島市内の絵です。55頁に
掲載）大きな赤丸の所に落とされて、半径

500メートル以内では人は即死、建物は原爆ドームのように、ほとんど壊されました。私は2km先の山中高女の2階の教室にいました。その辺りまで全部が火災になり、焼け野原になったそうです。這い出さずにそこにいたら、私の命はなかったろうと寂しく思いました。

私が18歳の時です。戦争は激しくなり、学校の若い男性の先生方は、兵士として次々召集され、教員不足となり、急きょ女子高等師範女学校の応募があり、それに合格したので尾道を離れて広島へ向かいました。山中高等女学校の校舎を借りての開校でした。教員を目指して大きな希望を抱き、さあこれからしっかり勉強しようと思ったその時です。

8月6日の朝です。ミン・ミンと蝉も鳴き、暑い一日が始まりました。登校準備をしていると、「敵機が来たよ～」と警戒警報が鳴り響き、助からなければと大急ぎで安全な場所、運動場の防空壕へと我先に逃げ込みました。中ではみんなドキドキ緊張して、手で頭を抱え、腕ですねを抱えて小さく丸くなって、恐る恐るしておりました。すると、警戒警報解除というサイレンが鳴り響き、「ああよかった、助かったね」とホッと安心して、「これからも敵機が来なければいいのにね」と話しあいながら、防空壕を出ました。さあ、安心して、また「勉強・勉強」と気分を変えて、一時間目の授業を受けるために2階の教室に入り、友だちといつものように楽しくおしゃべりしながら、先生が来られるのを待っていた時でした。8時15分、その時です。本当に突然でした。写真を撮るときあのフラッシュのような光が、大きく広く強くピカッと光ったと思った瞬間でした。何がどんなになったのかと思う間もなく、強い熱風と爆風で校舎は倒れ、私も少しの間気を失ってい

たようでした。何も分からないまま、どれほどの時間が過ぎたのでしょうか。しばらくして、気が付いてみると、周りは薄暗くどんな状態かわからないけれど、「ああ生きています、死んではいない」と、思いました。気が付きましたら、「みんな一瞬にして校舎の下敷きになったんだなあ」と、どうせすぐには外には出られそうもないし、「だれか助けに来て」とすがる思いでした。何も分からずしばらく静かにしていましたが、背中の上には、太い材木がずっしりと被さっている状況でした。また、なんだか体中が痛くて、右腕から半身が妙に熱くて何とも言えないだるさでした。なんだか皮膚がぶよぶよしているようで、気持ちが悪く、このままじっとしていてもだめだなあと思っ、隣の席の友だちに「木曾さん、木曾さん」と声をかけ呼んでみましたが、小さな声も聞こえず、一言の返事も返ってきませんでした。これは本当に大変なことになっているんだなあ、でも体が痛いと言ってはおれない、大切な命を守らなければ、なんとしてもここから出なければ助からないと思いました。今死ぬわけにはいかないんだ、一人でも頑張ろうと無我夢中で動いたのでしょうか。なんと明りがぼんやり見えてきて、ようやく抜け出すことができました。ああ助かった、やれやれとホッとしました。しかし、安心したのもつかの間です。目にしたものはすごいものでした。びっくりしました。あたり一面土煙でもうもうとしていて、息をするのも苦しいし、咳も止まりません。はっきりとは見えなかったけれど、見渡す限り一面の広っぱで、高いビルや建物も、みんなが住み慣れた家も、走っていた電車も何にもないんですから。今朝の広島はどこに消えたのか、考えもつかない有り様でした。

敵機の爆音も爆弾の落ちる音も全然聞こ

えず、ただ一瞬ピカッと強い閃光のみで、こんな想像もつかない状態になってしまったのです。恐ろしい目に逢ってしまったなあ思いながらも、なんとしても早く逃げないと、グズグズしていたら何が起こるか分からない。運よく命があったのだから、早く家に帰りたと思いました。でも、どう逃げればいいのか、そのすべは私には浮かできません。困ったなあといライラしていました。西も東も広島が、私にはさっぱり分からないのですから。

気がつくと、一人の先生が瓦礫の上に立っておられ、すごい形相で、髪を振り乱し、力を振り絞って、「早く東へ逃げろ、東へ逃げろ」と教えてくださっていました。倒れた校舎の上をヨロヨロと下に降り、幸い下敷きから助かった友だち5人と連れ添って、先生の指示のあった方向へ逃げようということになりました。みんな「大変だったね」と、お互いに慰めあいながらもお互いの傷の状態などを見せ合いました。ガラスで負傷した人は、出血で痛々しく、ちり紙やハンカチで押えて痛みをこらえていました。また、火傷の人は、赤く熱を持ち、肉がとれて目にも痛々しい様子でした。みんな少しでも手当や治療をしてあげたいけれど、今はそれもできず、それぞれ痛みを我慢して、安全な所へ早く逃げるだけです。先生の言われた方向、東へと運動場を通り抜けて行く途中、またも本当に驚きました。そこにいた人たちは、外にいたためでしょう、見てはおれない有り様で、地面に倒れてうめき声をあげている人、親が血を流しながら子どもの名前を呼び、子どもは泣きながら親を探して走り回り、皮膚は垂れ下がって可哀そうでした。大勢の火傷の人は、全身ボロボロを下げたように皮膚が垂れ下がり、「熱い熱い、水、水を」と助けを求めていました。そんな中を、私としても、誰を助

ける勇気も慈悲の心も出ず、「ごめんなさい、がんばって」と、苦しんでいる人を後ろ目に、大勢の死体も避けながら東に逃げました。痛みをこらえて、熱い中の一步一步は、ただ助かりたいという気力をたのみの歩みでした。本当に疲れしました。

ちょうどお昼を回ったころだったでしょうか。途中幸いにも、軍隊の駐屯所の前を通ったので、手当をしてもらえそうで、ああよかったと大喜びしました。だけど、ここもまた考えられないような光景で、周り一面に死者がどんどん運びこまれてきます。また、大勢の負傷者が次々と運ばれてきます。夏の暑さで悪臭が強く、倒れそうな状態でした。この世で元気でおられた大勢の人が、一瞬にして命を落とされ、とても残念だろうなど、寂しくなったことを憶えています。このように戦争は怖い、あつてはいけなと、その時思いました。ようやく私の順番がきて、火傷へ油を塗る応急手当をもらい、右手を三角巾でつったださいました。友だちもみんなそれぞれ手当を受け、お昼ごはんにと乾パンと金平糖までいただくことができ、疲れも少しとれたように思いました。なんとしても命があったことをいちばん喜び、ほんの少しホッとした気持ちになったことを、憶えております。

だいぶ東に逃げてきました。この辺りに来てみると、爆弾の被害も少なく、家も倒れてなくて空気もきれいでした。このころから私には体の痛みが出てきました。校舎の下敷きになった時の打撲のためでしょう。腰が痛み、息をするたびに左の肋骨が痛く、手で押さえなければいけないほどでした。また、頭を上げることもつらく心配でしたが、友だちに遅れてはいけない、一人にならないよう一緒にいなければと、大きな声で泣くこともできず、一生懸命歩き続

けました。友だちみんなも何を思っているのか、疲れているのか、だれ一人言葉もなく、痛さと怖さの中で黙々と歩くのみです。夕方近く辺りがうす暗くなったころには、ようやく目的地の海田駅に辿り着くことができました。私たちのように精一杯頑張っただけ歩いてきた負傷者の数も増えて、大混雑をしています。汽車も止まっているのかと心配でしたが、夜遅くなって、ようやく一本の上り本郷止めが来ました。これに乗らないと帰れないと急いで乗せてもらい、ようやく広島を離れることができました。本郷で一泊し、家に連絡をとり、朝一番の汽車で尾道に着きました。前の晩連絡をしておいたので、父が駅で首を長くして待っていてくれました。「ああ、お父さん」と駆け足で飛びつきました。とてもうれしく安心できました。「おお、よう帰ってこれたなあ」と抱きかかえてくれました。私は、これまで我慢していた涙が止めどなく流れ落ちました。私の体を見て父も驚いたようで、「これは大変だ。痛いじゃろう。早くお母さんの所へ帰ろう」と言って、二人とも言葉にならず、無言で疎開先の我が家によく着くことができました。

私は、校舎の中にいたためにこの程度で助かりましたが、右顔半分から首・肩・背中の中の半分、両腕とひどい個所は肉がとれて赤みを帯び、ジュルジュルと嫌な臭いが染み出て、目にも痛々しく醜い状態でした。夏の暑さにも困りましたが、体中が熱く、毎日の手当は大変でした。どうしようもない毎日で、親子ともども困り果て、むなしくやるせない日々が続きました。楽しいはずの青春も奪われ、希望ももてないような状況でした。周りの人々の風評では、もう何十年も広島には草木も生えないだろうとか、被爆者は長生きできないだろう、また女性は結婚も難しく、子どもは産めないだ

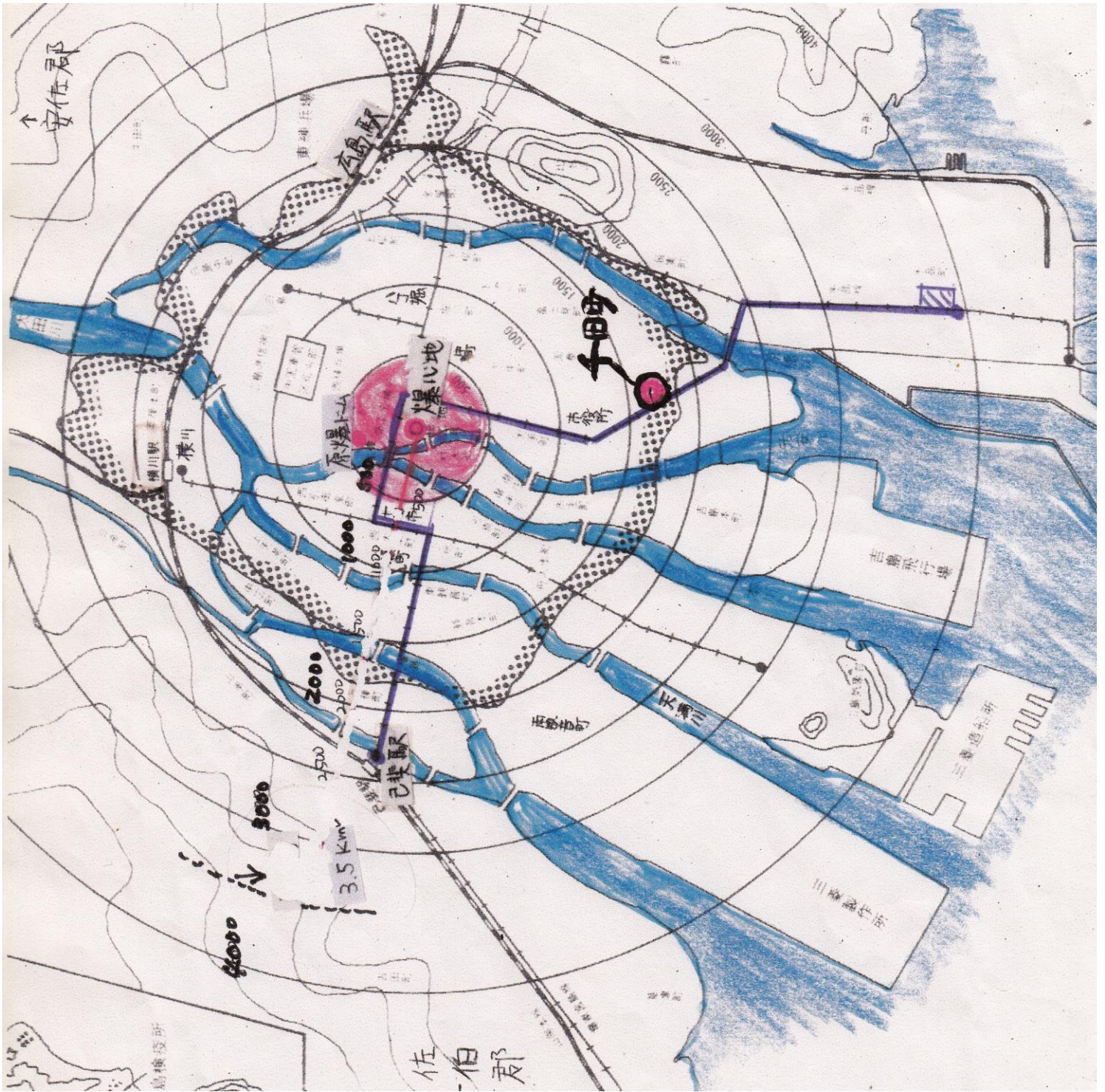
ろうなどなどと、人から人へと悪い話ばかりが広がり、自分が被爆したことは隠し通しての長い苦しい生活でした。

70年経った今では、火傷のあとは薄れて目立たなくなりましたが、今思えば、一刻も早く広島を出たことがいちばんの要因だったと思っております。寝込むというような大病はあまりしませんでした。時々頭痛・腰痛・首の病気には打ち勝ってきました。それに被爆したためにどんなことが起こるのだろうか、子どもにあるいは孫にまで影響はないのだろうか、一生不安な思いが脳裏から離れませんし、持ち続けていなければなりません。

今生きている私たちの使命は、核の怖ろしさを正しく伝えていき、戦争体験のない若い世代の人には、私たちのような苦しみには会わせたくない、絶対会わせてはならないと、今少なくなった被爆体験者が生きて生きて生き抜いて、核廃絶、戦争のない平和な世界をと、お願いするばかりです。

最後にお願ひです。子どもから大人までを巻き込む厳しい戦争は、絶対しない。一発で大勢の人を巻き込む威力をもつ核爆弾は絶対に作らない、使わない。また、両親からいただいた尊い命は、絶対無駄にしてはいけません。自分の命も家族の命も友だちの命も、みんな大切な命です。世界中の人と話し合い、平和な楽しい社会を築いていただきたいと思っております。

◇ 原爆被災地図



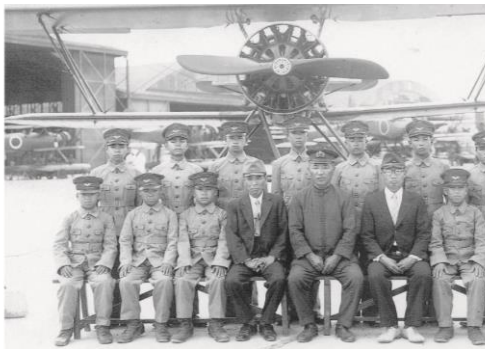
10 福山地方航空機乗員養成所

佐伯 新三さん

1931年(昭和6年)7月1日生まれ
と き：2016年(平成28年)2月27日
ところ：人権平和資料館

当時は三吉町に住んでいましたので、東国民小学校を卒業しました。

私たちは本科生ということで、国民小学校を卒業してすぐ養成所入りました。福山地方航空機乗員養成所の6期生です。



福山地方航空機乗員養成所本科6期一年生

○小学校を卒業して入るといのは、志願ということですか。

当時の社会状況では、長男が第一主義の時代でしたから、二男、三男は、自分で道を求めていかなければならないので、先生の勧めもあって、受験を志願しました。

小学校から行く人は、全部官費なんです。ですから、そこ(乗員養成所)へ入ったら、パイロットになるまで途中でやめることはできませんでした。(卒業後、5年間の勤務義務がありました。)

東小学校から5人入ったと思います。同じクラスの者が3人いました。もう亡くなった人もいるでしょうね。

全国から来ていました。呉から来た人が一人いましたが、あとは樺太・北海道・東北・関東などといったところですよ。東北の人が多かったと思います。気の毒に思った

のは、樺太から来ていた人ですね。3人おりましたね。終戦後帰るところがないわけですから。あと、西小学校から2人入っていました。油木や府中からも入っていました。

養成所は各地にありました。仙台、京都、松戸、米子、長崎にもありました。私たちは最初愛媛へ行く予定だったのですが、福山にもできたので福山へ行きなさいということでした。予科練は中学生を集めては養成するのだから、日本中いろんなところにあつたのではないのでしょうか。

海軍系の養成所は、長崎と福山、二つだけでした。陸軍系は、愛媛、米子とか印旛、岡山にもあつたかなあ。

他の人から羨ましいと言われました。休みの日には、すぐ家に帰れますからね。遠くから来ていた人は、休みになると、よくお城へ行っていました。

当時の歌の中にも、「飛行機乗りには、娘はやれぬ」と歌われていたのです。昭和19年頃には、戦況の悪化などで、母も「生きては帰れぬ」と察していたのでしょう。最後の記念にと、家族で写真を撮りました。その後、二人の兄も徴兵されて、北海道、千葉県に、それぞれ別れることになりました。

○6期生の方は、実際には戦争には行かなかったのですか。

それはなかったです。基礎学科ですから。2年基礎学科があつて、3年目に操縦とか整備とかに分かれるんです。私は操縦科を予定していました。戦闘機ではなく、輸送が主の飛行機です。あの頃は、パラオとかグアムに水上機で輸送していましたから。

戦争が激しくなつて、宅間海軍航空隊の分遣隊として、こちらへ入って来ましたが、

もとは民間だったんです。所長は海軍の大佐で、堤さんという人でした。

私たちは、昭和19年の7月ごろ軍籍に入りました。戦争が激しくなって、私たちも軍籍に入ったんです。

昭和19年7月 甲種予備練習生

11月 要員召集で、海軍一等飛行兵曹

終戦時は、海軍上等飛行兵曹になっていたようです。

○昭和19年3月が宅間の分遣隊、昭和20年3月1日が福山海軍航空隊ということですね。

～当時の写真を見ながら～

第1分隊と第2分隊があつて、各4班に分かれて全部で8班ありました。各班12人で、全員で96人になります。

○日常生活はどのようなものだったのでしょうか。

～海軍航空隊の全体図（64頁）を見ながら～

兵舎が上から6段ぐらいありまして、一番上が食堂と風呂場がありました。その下に段々に兵舎があつて、一番下に体育館がありました。となりに実習的な建物（例えば木工的な基礎技術とか通信技術とかを教える場所）を作っていたのですが、やめてしまいました。

事務所の前が運動場でした。そして、本館・体育館・医務室がありました。その隣に飛行機の格納庫があり、裏に倉庫がありました。前の滑走路まで飛行機を引っ張っていきます。現在、滑走路は埋め立てによってなくなっていますけれどね。滑走路といっても、海へ降りるだけです。そして海面を滑走してちょうど箕島の方向へ一直線

で飛び上がるわけです。降りるときは、当時塩田があつた湾の方へ向って降りてからこちらへ入って来ていました。

まず一番よかつたのは、所長の堤さんが、「暴力は絶対に振るってはいけない。」と言われていたことです。その当時は、軍隊では暴力は日常的に行われていましたからね。「絶対に生徒を殴ってはいかん。」と、教官に厳しく言われていました。教官は、海軍の教官と民間の教官と一人ずつでした。だから、私たちは軍人に殴られたことはありません。けれども、民間から来た教官にはよく殴られました。

それと、日常の生活は、何不自由なく過ごしていました。市民は食べるものもなく苦しい生活だったと思うのですが、きちんと献立を作つて、栄養のあるものを食べさせてもらつて満足な食事でした。一般の人は大豆とかを食べていたようですが、多少麦も混ざっていたと思いますが、ほぼ白米を食べていましたので、食事は十分でした。

毎朝6時に起床して、9時に消灯でした。消灯前6時の夕食後は、自由に自分で学習する自習時間がありました。食事は今の学校給食のように、自分たちで食器を消毒して配膳や片づけをしていました。

○食事以外でも不自由は感じておられなかったのでしょうか。

なかつたですね。本や辞書も立派なものを与えてもらいました。辞書は国語・漢和、それに英語の辞書もありました。聞いた話ですが、堤所長は、イギリスへ武官で派遣されていたので、英語はペラペラだったそうです。

時間割はありましたが、よくは憶えていないのですが、国語、漢文、数学、物理そして通信や手旗など実務がありました。そ

れから体育があり、回転フープをさせられたり、軍靴を履いて大門駅の方まで走らされたりと、かなり厳しい教科でした。

○実際に飛行機の操縦まではされなかったのですか。

生徒を体験として飛行機に乗せるという話はありませんでしたが、燃料のガソリンがだんだん無くなるから乗せられないということで、飛行機に乗ることはありませんでした。

それで、終戦後になってどうしようかということですが、運輸省管轄の鉄道教習所がありまして、これも同じように官費で養成するところで、そこへ行かないかという話はありません。

○一つ疑問があるのですが、グラマン戦闘機が最初に来たのが、昭和20年の3月なのか6月なのか、諸説あるのですがどうなのでしょう。

1回だけではなかったですね。はっきりとは憶えてないのですが、記録によれば、3月19日、7月2日、7月24日、25日、28日と何度も空襲があったことがわかります。7月の空襲のとき、機銃掃射で兵舎のベッドや私物箱が被害にあった人もいました。私たちはグラマン戦闘機の攻撃のときは防空壕へいち早く入って難を逃れたのですが、1mぐらい離れたところを機銃掃射の弾が走りました。飛行機は翼だけを並べていて、それを攻撃していましたが、燃料もないので燃え上がることもありませんでした。私たちがいた兵舎の階段などにも弾が当たっていました。

私の知る限りでは、職員も生徒も犠牲者はいなかったと思うのですが、守衛の人が

逃げられなくて犠牲になったのではないかと思います。

○実際に琴平水偵隊の椎根中尉が特攻隊として出撃されたということですが、何度もあったのでしょうか。14人が出撃されたということなんですが。

福山から出て、天草や指宿に行って、そこから指令を受けて出撃するわけです。福山から「帽振れ」で飛び立つわけですが、どの人がどのようになったかは、私はよくわかりません。

3回ぐらいだったと思います。私たちが知らない間に飛び立ったのもあったのではないと思いますが、「帽振れ」で送った憶えはあります。

○夏にサツマイモを植えに行ったと言われましたが、ずっと養成所におられたのではなく、春から夏にかけてあちこち行かれたのでしょうか。

たまたま開墾ということで、中津原の河原へサツマイモを植えに行きました。暑いときだったので、とてもきつかったです。芦田川の河原（現ゴルフ場）へも日本の戦闘機が不時着していたんですよ。エンジンの調子が悪かったのか、整備をしたらまた飛び立ちました。

○養成所と言っても学校だから、予科練の人との付き合いはなかったということですか。

日常の付き合いはなかったです。あると言えば、私たちは一番上の兵舎にいたから、下の兵舎にいた予科練の厳しい訓練をよく見ていました。毎晩、鍛えられるんだから

ね。海軍魂注入棒というのがありました。一人のミスが、みんなの命に関わりますから。だから訓練でも連帯責任として厳しくやられていたようです。

兵舎は違っていました。食堂も風呂も一緒です。私らは、自由時間や自習時間がありました。

予科練の人の生活については、付き合いもなかったし、よくわかりません。予科練は短期間の養成で、すぐに別の基地に行くわけです。631 部隊など、前戦基地にいた人がこちらへ帰ってきて基地にしました。「晴嵐 (せいらん)」という飛行機へ乗っていたという人もいました。

○8月15日の終戦は、どのような状態で迎えられましたか。

今でも憶えています。8月15日は日曜日でした。休みだから自由に出てもよいということで、外出していました。とても暑い日でした。

○実際に玉音放送は聞かれましたか。

聞くことは聞きました。ただその夜に軍人さんが荒れまして、兵舎の中で日本刀を振り回す人もいました。

それから、一週間ぐらい身の回りの残務整理をしました。書類などは全部焼くので、時間がかかりました。特に本はなかなか焼けなくて大変でした。

○海軍にはたくさんの食料があったと聞いたのですが、それをアメリカに渡すぐらいだったと、近所の人が大勢にきて来たようですが。

終戦のとき、近所の人、いろいろな器

具なども大勢にきていました。衛兵はいたけど、あまり取り締まりはしていなかったようです。

残っていたのは、飛行機ぐらいのものですかね。全部海の中へ処分したようです。格納庫は拳銃など、軍のものがけっこうありましたが、全部処分したのでしょうかね。

缶詰もたくさんありました。私たちは帰るとき、一週間分ぐらいの乾パンをもらいました。北海道の方へ帰る人は、日数もかかりますからね。

○福山空襲で、三吉町の辺りは焼けてはいないですよ。

そう、実家は焼けませんでした。焼けなかったというよりは、消したんです。二番目の兄が、東京の目黒でやられて、田端でやられて、どうしようもなく福山に帰っていました。その兄が、「俺はもう逃げない」と言って、家にも3発ぐらい落ちたんですが、それを消して、棟続きで類焼するの、防火用水の水をかけて消したようです。空襲の後、特別外出で家に帰ったら、近所の人、焼け出されて居場所もないようでした。私の家も畳の上など灰が充満してどうしようもない状態でした。ですから、父親に挨拶をしてすぐに戻りました。

○終戦の時、所長さんはどのような訓示をされましたか。

解散のときは、渡名喜大佐からは、特に何もありませんでした。訓示もありませんでした。あつけないことでした。海軍の兵士などは荒れていた人もいましたが、私らはそこまで深刻ではなかったと思います。敗戦は厳粛に受け止めなければいけません。入所した時の目標はなくなりました。

が。

たった一年半しか養成所にいませんでしたが、同期生とは、今でも会ったり、連絡をとったりしています。それだけ中身の濃い生活を送ったんだなと思います。

○戦後の状況は

終戦後の国内の状況は、食糧難、戦災復興、職業難の社会でした。私個人として、高校を卒業しても、職業を得るのが大変でした。

福山市の臨時職員として、5年間勤めて、やっと、水道局の水質検査という自分の目標に合った職に就くことができました。

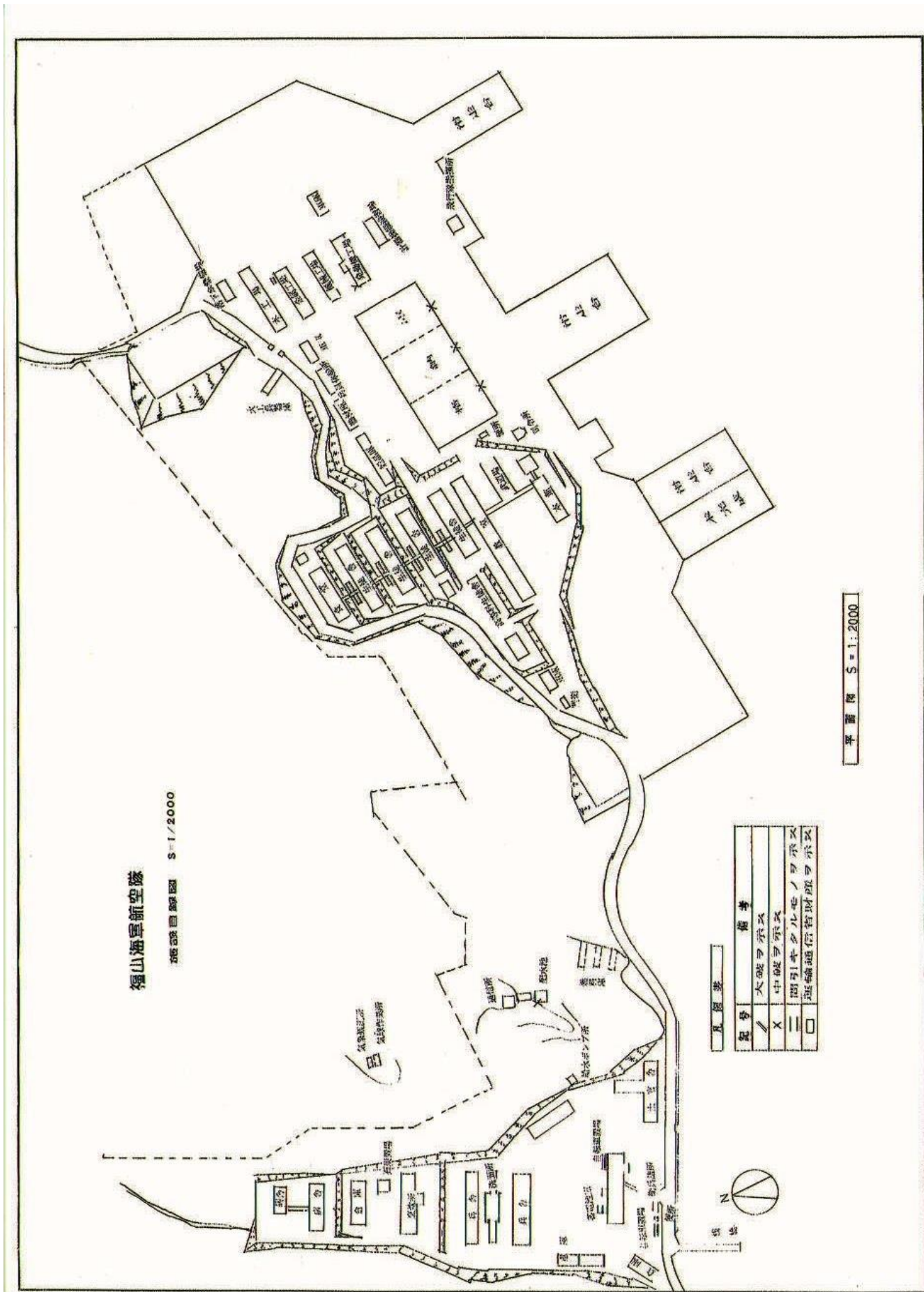
当時、福山市では、夏期大学校を開いて社会教育をしていました。特に印象深いのは、森戸辰夫先生（後に広島大学学長）の「教育と政治」の講義でした。憲法や民法も改正されましたが、混乱の社会状況の中で、労働運動も活発でした。

また、市の発展のためにも、復興事業の推進に努め、身近な問題として給水事業の安定と芦田川の水質改善、水量の確保に全力を注ぎ、職務に努めてまいりました。長い年月の努力を見るとき、今日の福山市100周年の安定した上水道が確保されたのではないかと確信しています。

職務として、40数年にわたり上水道を管理し、市制の創設は水道が発端だったと知る者としては、感慨深いものがあります。

○今日はどうもありがとうございました。

◇ 福山海軍航空隊施設目録図



【証言をしてくださったみなさん】

池尻 博さん (1925 年生まれ)	杉原 弘さん (1938 年生まれ)
江木 吉江さん (1934 年生まれ)	杉原 靖子さん (1941 年生まれ)
江草 孝昌さん (1934 年生まれ)	清代 律子さん (1927 年生まれ)
枝広 稔さん (1937 年生まれ)	高石 朝美さん (1933 年生まれ)
落合 照江さん (1929 年生まれ)	高橋 加造さん (1944 年生まれ)
開原 則二さん (1937 年生まれ)	土井 茂さん (1924 年生まれ)
河相 博子さん (1932 年生まれ)	藤井弘一郎さん (1938 年生まれ)
木村 滋さん (1931 年生まれ)	松本 和子さん (1925 年生まれ)
近藤 茂久さん (1933 年生まれ)	水田 富子さん (1935 年生まれ)
佐伯 新三さん (1931 年生まれ)	三鼓 照子さん (1933 年生まれ)
佐藤 隆江さん (1939 年生まれ)	森近 静子さん (1937 年生まれ)

(五十音順)

【協力してくださったみなさん】

福山市霞公民館，霞学区自治会連合会

【編集委員】

福山市人権平和資料館と「ふくやまピース・ナビ」のみなさん

井崎 育子，杉原 弘，富山真理子，中山由紀夫，船井真奈美，
古谷 佳子，堀家美智子，光成 京子，三宅予枝子 (五十音順)

私の戦争体験証言集
P i e c e f o r P e a c e
～戦争の記憶を繋ぐ～

2016 年 (平成 28 年) 7 月発行

編集 福山市人権平和資料館

ふくやまピース・ナビ

発行 福山市人権平和資料館

〒720-0061

福山市丸之内一丁目 1 番 1 号

電話 084-924-6789

